バンッ！ バンバン！ バンッ！ バスンッ！
トレーニングルームに鈍い連続音が響く バゴンッ！ ガチャァンッ！
「あっちゃ～、またやっちゃったあ…」
トレーニングで汗を滴らせたマルタさんがてへぺろとばかりに舌を出す。
マルタさんのパンチで哀れなボロくずとなったサンドバッグが床の上に横たわっている。
「おほん…、見ていらしたんですかマスター。
あまりにサンドバッグを壊すもので、霊基の出力調整をしてもらったんですが
もっと弱体化させてからでないとダメですね。
マスターはボクシングに興味があるんですか？」
「よければ私とヤってみますか？ な～んて♥」
マルタさんが何気なく
笑顔で冗談交じりに言ったその言葉に、
俺は思わずドキドキしてしまったのだ。

人気のない深夜のリング…、
そこでマルタさんがウォームアップしながら俺を待っていた。
『来ましたね♥ ふふっ、深夜のリングで男と女がふたりきり…
それでやる事と言ったら…
ボックスしかないですよね♥』
(こうやって改めてマルタさんのビキニ姿を真正面から見ると…
つくづくエッチな身体してるなあ…)
思わず股間に血液が滾ってしまいそうになる
『さあ、リングに上がって♥
ちゃんと手加減してあげますからね♥』

人気のない深夜のリング…、
そこで私はウォームアップしながらマスターを待っていた。
『来ましたね♥ ふふっ、深夜のリングで男と女がふたりきり…
それでやる事と言ったら…
ボックスしかないですよね♥』
（私とボクシングしてみたいだなんて、
マスターも大概命知らずですね…
そんな無謀な所も気に入ってますけど♥）
『さあ、リングに上がって♥
ちゃんと手加減してあげますからね♥』

ぷにぷに

『約束通り、霊基の出力を最低まで落としてもらいました♥
レベル1ですよ？　これで私も普通の女の子と変わらないですね♥
これでマスターとボクシング出来ますよ♥』
マルタさんがにっこりと無邪気な笑顔を向けてくる
ニコッ
（自分で普通の女の子とか言っちゃうあたりがマルタさんだなあ…）
『マスター、何か失礼なこと考えてませんか？』『ひえっ…』
『ほらほら、普通の女の子とボクシングして
負けちゃうのが怖いんですか？大丈夫ですよ、マスターだって
こんなに鍛えた筋肉がついてるんだから、自信を持って♥』
そう言ってマルタさんが俺の腹筋を
グローブ越しにさわさわと撫でてくる

『約束通り、霊基の出力を最低まで落としてもらいました♥
レベル1ですよ？　これで私も普通の女の子と変わらないですね♥
これでマスターとボクシング出来ますよ♥』
ニコッ
（微妙な表情…）
『マスター、何か失礼なこと考えてませんか？』『ひえっ…』
『ほらほら、普通の女の子とボクシングして
負けちゃうのが怖いんですか？大丈夫ですよ、マスターだって
こんなに鍛えた筋肉がついてるんだから、自信を持って♥』
そう言ってマスターの腹筋を
グローブ越しにさわさわと撫でて確かめる
（うんうん、これなら本気でパンチ打っても大丈夫そうね♥）
私はマスターが頼もしくてつい嬉しくなってしまう

モゴ
モゴ
カプッ

二人、自分のコーナーに分かれて準備を整える
俺はグローブとマウスピースの調子を確かめた

カプッ

『私はレベル1になっちゃいましたけど、
マスターのレベルはいくつでしたっけ？
150？160？
これだけハンデがあって
負けるわけにはいかないわよね♥』
そう言いながらマウスピースを咥えるマルタさん

〈マスターレベルとは違うと思う…〉
マルタさんがゴングのタイマーをセットして
二人ともリングの中央へ向かう

モゴ

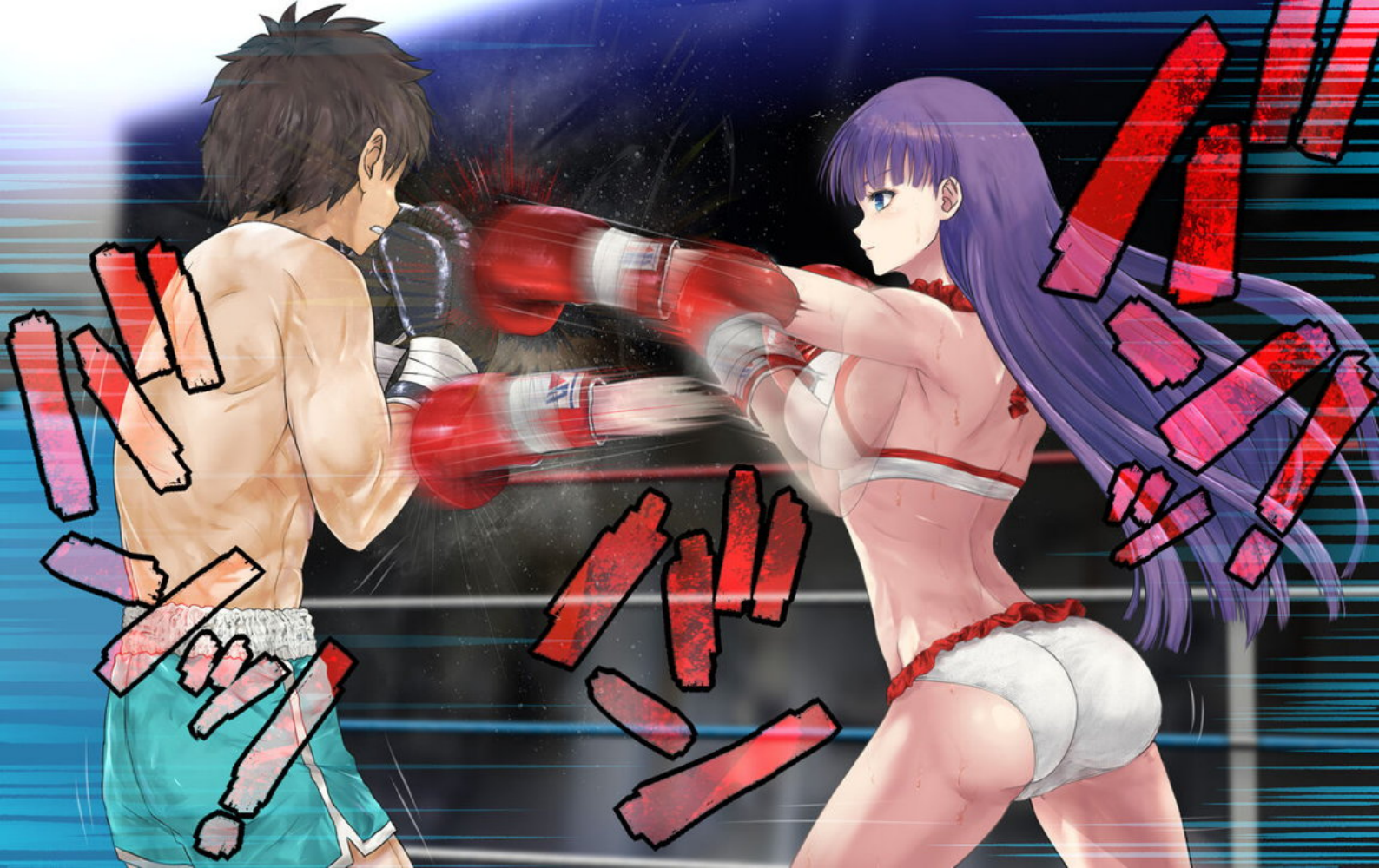
モゴ

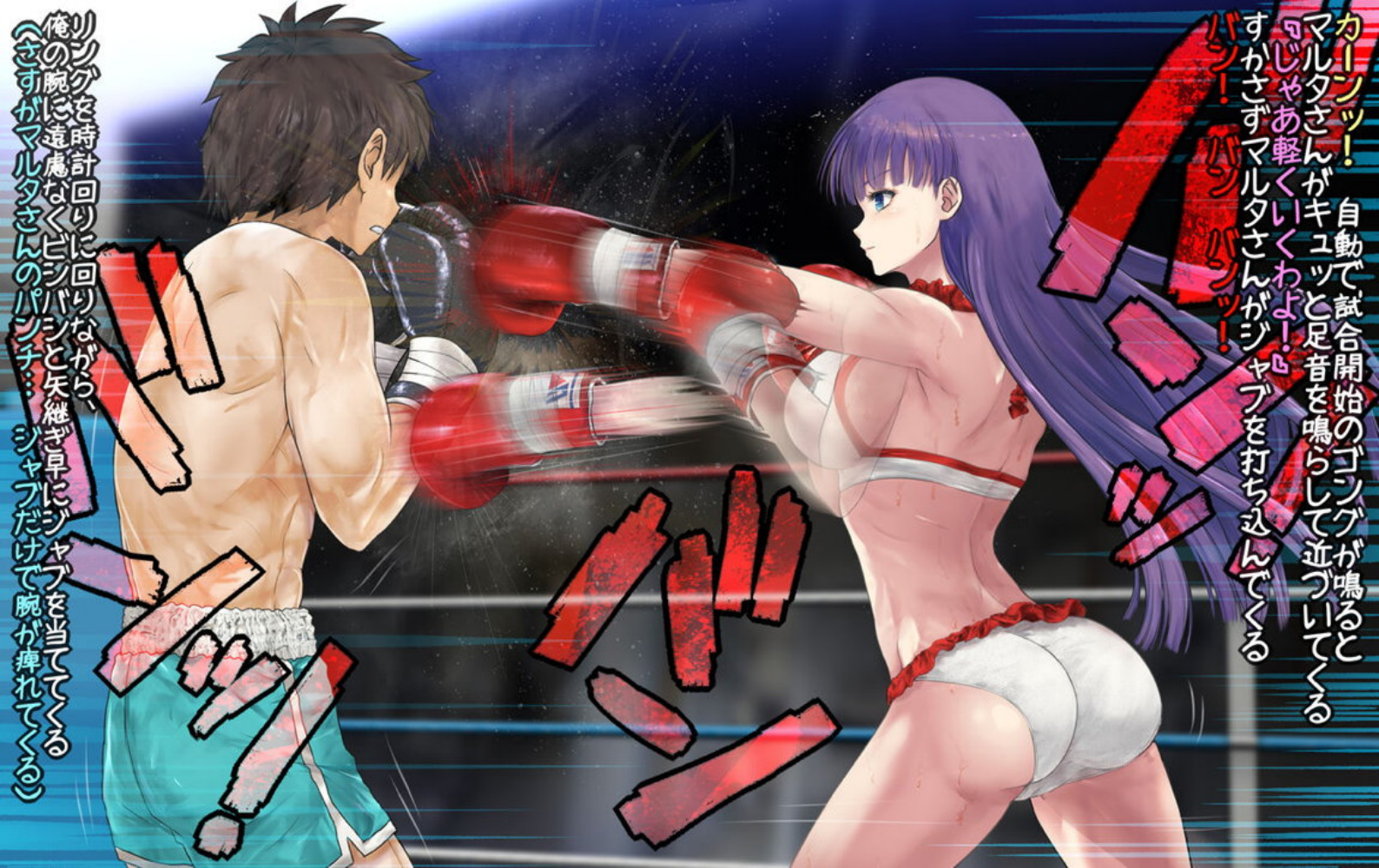
二人、自分のコーナーに分かれて準備を整える
マスターはグローブとマウスピースの調子を確かめている
カポッ
『私はレベル1になっちゃいましたけど、
マスターのレベルはいくつでしたっけ？
150？160？
これだけハンデがあって
負けるわけにはいかないわよね♥』
そう言いながらマウスピースを咥えた
モゴ
モゴ
（楽しませてもらいましょう♥）
私はゴングのタイマーをセットして
二人ともリングの中央へ向かう

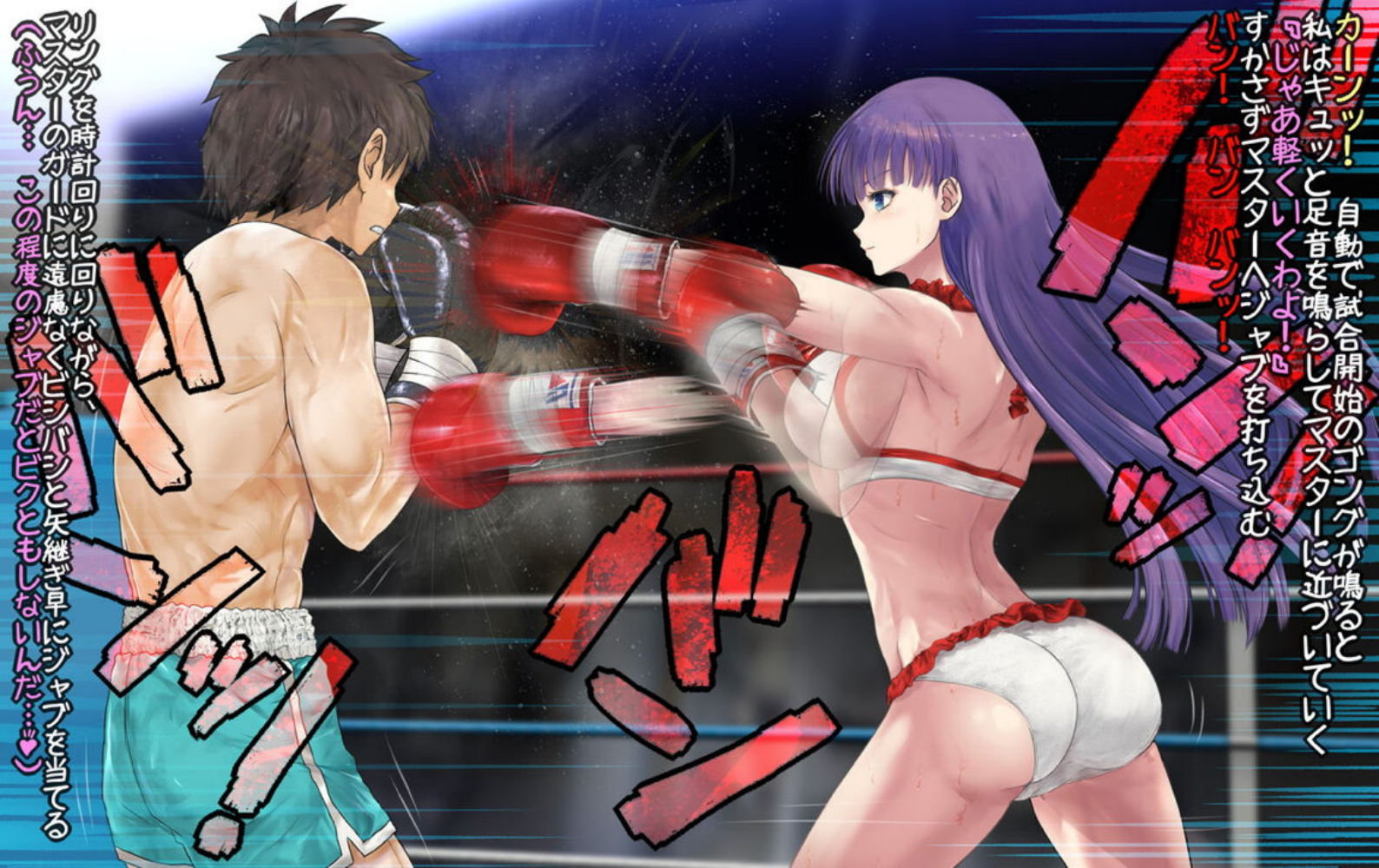
クイ
クイ

クイ
クイ
マルタさんがかわいらしくファイティングポーズを取って手招きをしてくる
「では、マスターの日々のトレーニングの成果を見てあげましょう♥胸を貸してあげますよ、かかってきてください♥」
「どちらかの足腰が立たなくなるまで…、徹底的にヤり合いましょうね♥」
マルタさんがにっこりと俺に嬉しそうな笑顔を向ける
「優しくしてね…？」「優しくノックアウトしてあげますよ、マスター♥」

クイ
クイ
私はファイティングポーズを取ってマスターを手招きをした
『では、マスターの日々のトレーニングの成果を見てあげましょう♥胸を貸してあげますよ、かかってきてください♥』
『どちらかの足腰が立たなくなるまで…、徹底的にヤり合いましょうね♥』
『優しくしてね…？』『優しくノックアウトしてあげますよ、マスター♥』
私はにっこりとマスターに嬉しげに笑顔を向ける


ドゴッ
ドゴッ


カーンッ！
マルタさんがキュッと足音を鳴らして近づいてくる
自動で試合開始のゴングが鳴ると
『じゃあ軽くいくわよ！』
すかさずマルタさんがジャブを打ち込んでくる
バン！バン！バンッ！
リングを時計回りに回りながら、
俺の腕に遠慮なくビシバシと矢継ぎ早にジャブを当ててくる
（さすがマルタさんのパンチ…　ジャブだけで腕が痺れてくる）


カーンッ！
自動で試合開始のゴングが鳴ると
私はキュッと足音を鳴らしてマスターに近づいていく
『じゃあ軽くいくわよ！』
すかさずマスターへジャブを打ち込む
バン！バンバンッ！
リングを時計回りに回りながら、
マスターのガードに遠慮なくビンバンと矢継ぎ早にジャブを当てる
（ふっん…　この程度のジャブだとビクともしないんだ…♡）

タン
タンッ
ゆさっ♡
ゆさっ♡
キュッ
キュッ

マルタさんの出だしのギアの高さに思わず弾かれるようにバックステップで距離を取ると意外にもマルタさんは追撃をしてこない息を乱すこともなくタンタンとステップを取っている上下のリズミカルなステップの縦揺れに合わせてマルタさんのおっぱいがふるふると揺れている
タン
タンッ
ゆさ♡
ゆさっ♡
キュッ
キュッ
『ほらっ、打ってこないの？私に強いところを見せてくれるんでしょう？攻めてこないと私に勝つなんてできないわよっ！』
（よぉし、今度はこっちのパンチを見せてやる…！）

私のいきなりの打ち込みにマスターは面食らったようで思わず弾かれるようにバックステップで距離を取る
私はあえて追撃をせず、マスターのテンションを高めることにする
まだ息を乱すこともなくタンタンとステップを取ってマスターの様子を見る
上下のリズミカルなステップの縦揺れに合わせるように
私の気持ちも胸も弾んでいる
タン
タンッ
ゆさ♥
ゆさっ♥
キュッ
キュッ
『ほらっ、打ってこないの？
私に強いところを見せてくれるんでしょう？
攻めてこないと私に勝つなんてできないわよっ！』
（楽しませてもらわなくちゃ…♥）

ビッ
ビッ
キュッ
キュッ

ジャブを打ち込んでいくが
マルタさんはスウェーで上体を揺らし
俺のパンチはマルタさんの目前数センチで止まり
完全にパンチを見切られている
ビッ
ビッ
ギュッ
ギュッ
『大事なのはパンチをただ打つよりも、パンチを当てる事ですよっ！
上下に打ち分けるっ！』
マルタさんは俺にアドバイスを飛ばす余裕を保っている
（ギアをもう一段上げる…！）

マスターはジャブを打ち込んでくるが
私はスウェーで上体を揺らし
私の目前数センチで止まる所で
彼のパンチを見切って止める
ビッ
ビッ
キュッ
キュッ
『大事なのはパンチをただ打つよりも、パンチを当てる事ですよっ！
上下に打ち分けるっ！』
私はマスターにアドバイスを飛ばす余裕を保って彼のパンチを躱す
（マスターのギアが上がってきた…！）

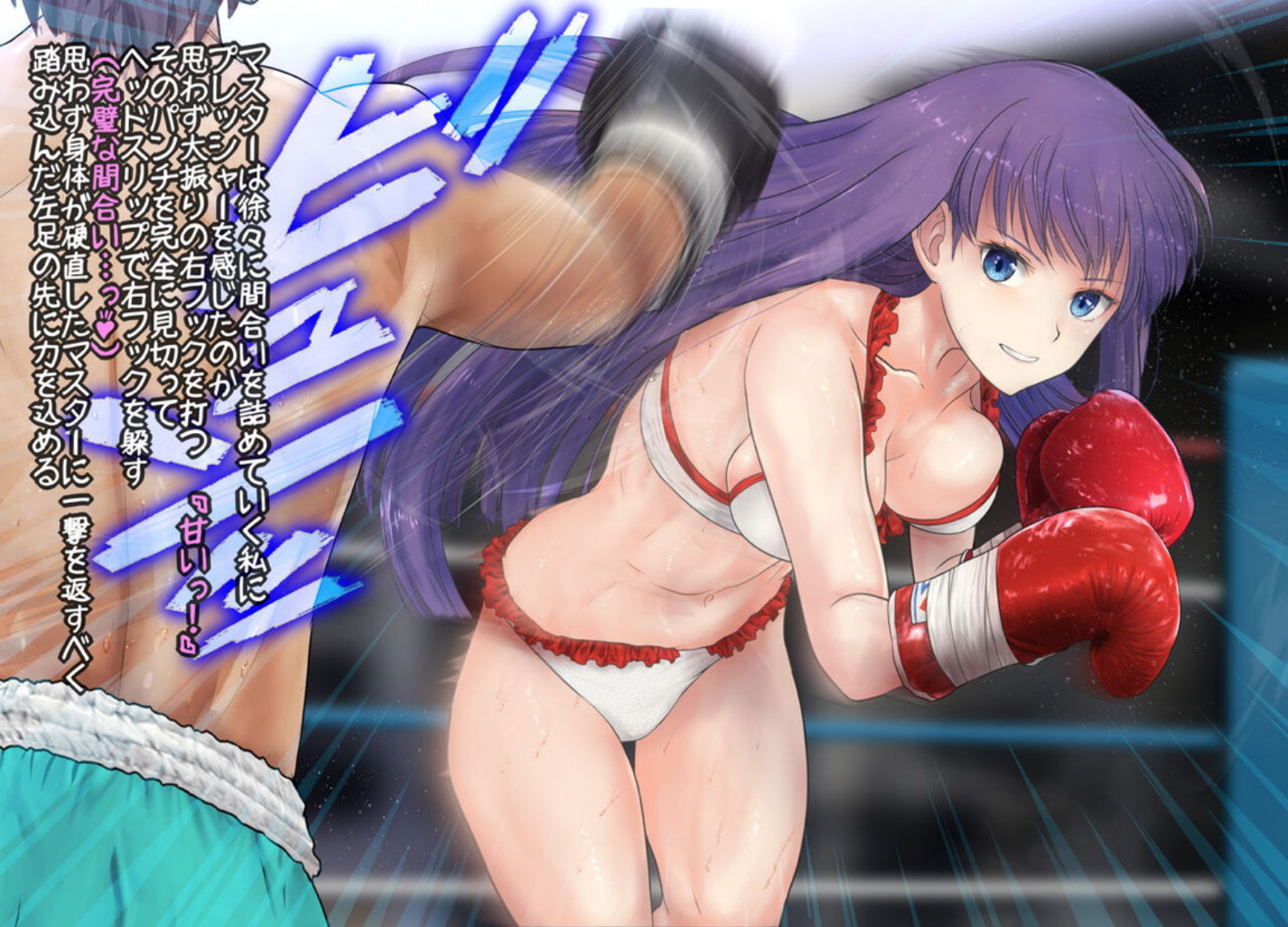
ヒュ
ヒュ
ヒュ
バシッ
バシッ
バシッ
ぷるぷる
ぷるぷる

一歩踏み込んでインファイトを仕掛けていくするとマルタさんはガードを固めて真っ向から俺のパンチを受ける
バン！バンッ！
パンチを受け止めるたびにマルタさんの大きな胸が反動で揺れる
ぷるん
ぷるん
ヒュ
ヒュ
ヒュ
バムッ
上下に打ち分ける俺のボディをマルタさんは腹筋で受け止める
バムッ！（分厚いタイヤを叩いたみたいだ…！）
俺の攻撃をものともせず、じりじりと戦車のように近づいてくる
「くっ…！」

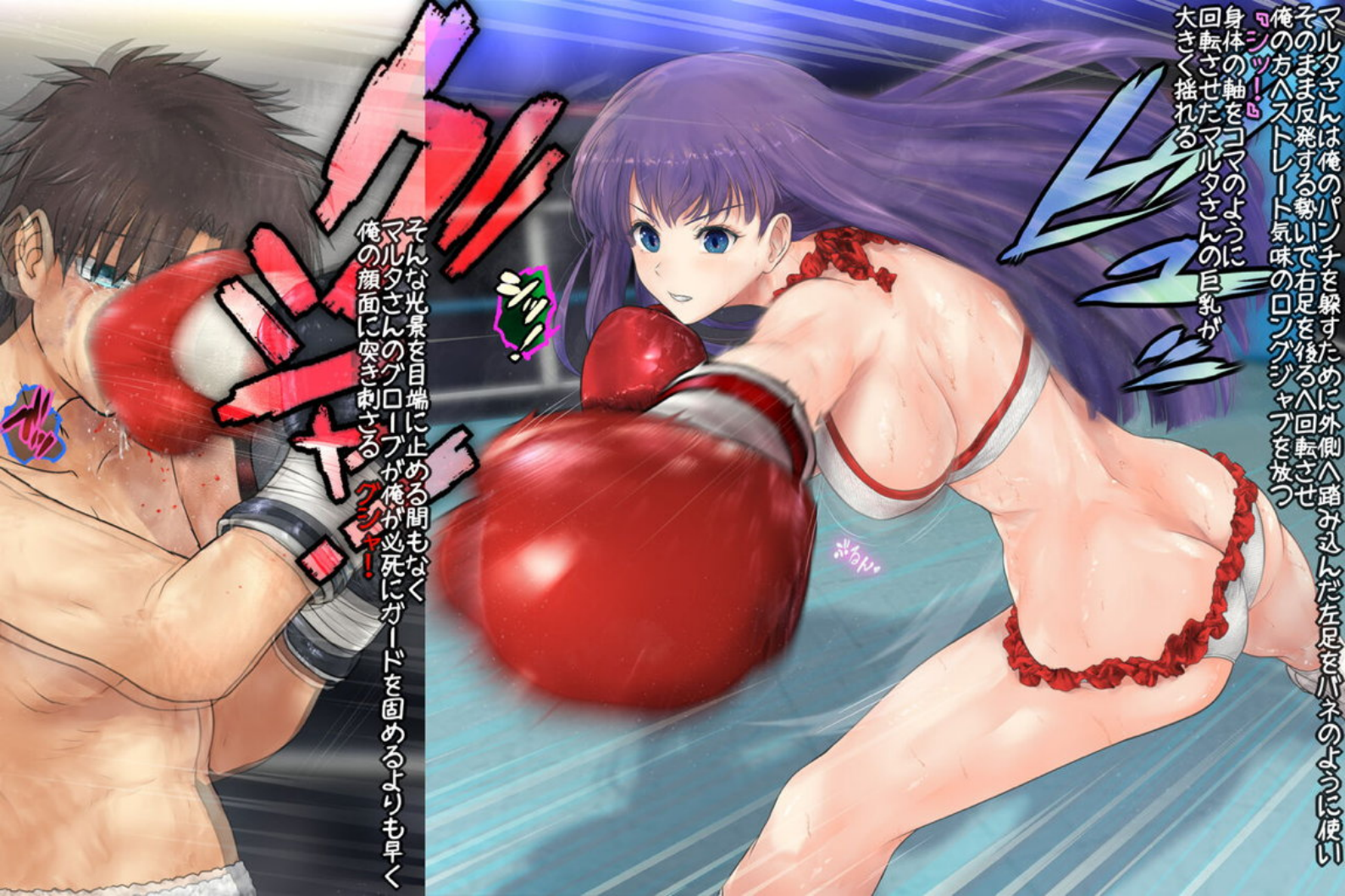
マスターは一歩踏み込んでインファイトを仕掛けてくる
私はガードを固めて真っ向から彼のパンチを受け止める
バン！バンッ！
ガードを叩かれてパンチを受け止めるたびに重心を揺らされる
（なかなかの強いパンチ…！）
ヒュ
ヒュ
ぷるん
ぷるん
バムッ
マスターは私のアドバイス通りパンチを上下に打ち分け
私のボディを叩いてくるが私は腹筋で受け止める
バムッ！
（いいパンチね…！）
マスターの攻撃に揺さぶられず、私はじりじりと近づいていく
「くっ…！」
私はそこでマスターの焦りを感じる

ドシュッ

ビュッ
俺は徐々に間合いを詰めてくるマルタさんにプレッシャーを感じ
思わず大振りの右フックを打つ
『甘いっ！』
そのパンチは完全に見切られ
マルタさんにヘッドスリップで右フックを躱された
思わず身体が硬直する
（中に入られた……！？）


マスターは徐々に間合いを詰めていく私に
プレッシャーを感じたのか
思わず大振りの右フックを打つ
そのパンチを完全に見切って
ヘッドスリップで右フックを躱す
『甘いっ！』
〜完璧な間合い…っ♥〜
思わず身体が硬直したマスターに一撃を返すべく
踏み込んだ左足の先に力を込める

ドゴッ!
ビシッ!
ぶるんっ


マルタさんは俺のパンチを躱すために外側へ踏み込んだ左足をバネのように使い
そのまま反発する勢いで右足を後ろへ回転させ
俺の方へストレート気味のロングジャブを放つ
『シッ！』
身体の軸をコマのように
回転させたマルタさんの巨乳が
大きく揺れる
シッ！
そんな光景を目端に止める間もなく
マルタさんのグローブが俺の必死にガードを固めるよりも早く
俺の顔面に突き刺さる
グシャ！

私はマスターのパンチを躱すために外側へ踏み込んだ左足を
バネのように使い
そのまま反発する勢いで右足を後ろへ回転させ
マスターにストレート気味の
ロングジャブを放つ
シッ！
身体の軸をコマのように
回転させた私の胸が
大きく弾む
シッ！
ぶるん
マスターが私の反撃に必死にガードを固めるよりも早く
私のグローブがマスターの顔面に突き刺さる
くっ～～～っ、気持ちいい…っ♥
グシャ！
ベッ

ドガッ
ガクッ
ドクッ
ドクッ
ドクッ

マルタさんは俺にパンチを当てた反動を利用し
再びグルンと上半身を回転させて右フックを放つ
俺はマルタさんの息もつかせぬ連続コンビネーションに
全く対応できず
そのままマルタさんの強烈な右フックを顔面に受け入れた
バグンッ！『ぶふっ！』
マルタさんの強烈な一撃に早くも鼻血が吹き飛ぶ
その衝撃の反動でブラからこぼれそうなほど
マルタさんのおっぱいが弾む
視界に星が飛び、頭がくらくらする
〈マルタさんのパンチでいきなり気持ち良くされてしまった……！〉
ドガッ
ガシッ

私はマスターにパンチを当てた反動を利用し
再びグルンと上半身を回転させて右フックを放つ
マスターは私の息もつかせぬ連続コンビネーションに
全く対応できないで
そのまま私の強烈な右フックを顔面に受け入れた
バグンッ！「ぶふっ！」
ゆさっ
ボタッ
ボタッ
私の強烈な一撃に早くもマスターの鼻から鼻血が吹き飛ぶ
その衝撃の反動でブラからこぼれそうなほど
私のおっぱいが弾んだ
パンチの余韻に私の心も負けず劣らず心も弾む
（ひゅう…♥ プチ抜いたぁ…♥）
ぷるっ

『もう一発ぅ！』
ふっ！
ドボォッ！
マルタさんのエグいコンビネーションのフィニッシュを飾る渾身のボディブローが俺のみぞおちに叩き込まれる
『ウッ！？』思わず肺から呼吸を絞り出されみっともない声をあげさせられてしまう
完全に呼吸の自由を奪われ、くの字に折り曲げられた体勢のまま膝をつき、前のめりにリングに崩れ落ちてしまった。
あまりの苦しさに何も物を考えられない

「もう一発ぅ！ふっ！」
ドボォッ！
私の自慢のコンビネーションのフィニッシュを飾る渾身のボディブローをマスターのみぞおちに叩き込む
「ウッ！？」
思わずマスターは肺から呼吸を絞り出されみっともない声をあげてしまった。
そのまま私のパンチで、くの字に折り曲げられた体勢のまま膝をつき、前のめりにリングに崩れ落ちてしまった。
私の目の前で、相手がリングに沈むこの瞬間はたまらない

スリー
ツー
ワン
あはっ♥
うおえっ…
うぐっ…
ぶる
ぶる
ぶる

（息ができない……！）
マルタさんのパンチで思わずリングにくずおれて内臓を潰されたかと思うような苦しみに耐える
「うぐっ……、うぉえっ……」
（これがマルタさんのパンチ…）
「まだ始まったばかりですよ？がんばって立ってくださいね♥」
前屈みになって俺の様子をうかがうマルタさん
「それじゃカウント入れますよ、わーん、つー、すりー……♥」
マルタさんが嬉しそうな声でカウントを数え始める
あはっ♥
ワン
ツー
スリー
うぐっ…
うぐぐっ…
ぶる
ぶる
ぶる

（ダウン…♥）
マスターは私のパンチで思わずリングにくずおれて内臓を潰されたわと思うような声を上げて苦しみに耐えている
「うぐっ……、うぉえっ……」
（まだ終わらないですよね…）
「まだ始まったばかりですよ？がんばって立ってくださいね♥」
前屈みになってマスターの様子をうかがう
（うんうん、まだイけるわね♥）
「それじゃカウント入れますよ、わーん、つー、すりー……♥」
マスターの大丈夫な様子に、まだ試合が続けられるとつい嬉しそうな声でカウントを数え始めてしまう
あはっ♥
ワン
ツー
スリー
うぐっ…
うぉえっ…
ぶる
ぶる

シックス
セブン
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ…
ガッ
グッグッ…

シックス
セブン
ハァ
ハァ
ハァ…
グッ
グッグッ…
『フォー、ファイブ…』マルタさんのカウントが進む
俺は腹の痛みをこらえながらリングに手をついて立ち上がる
『シックス、セブン…。やっぱり立ち上がれましたね♥』
『ハァ…、ハァ…』マルタさんの目を見ながらファイティングポーズを取る
『まだまだ闘志充分ですね、そういうところが好きですよ、マスター♥』
(何がレベル1のパンチだよ…　こんなの男でもそう耐えられないぞ…)
『でも私に敵わないって思ったら、私に令呪使ってもいいんですよ?
もっとハンデあげないと私には敵わないんじゃないですか?』
『何言ってるんだよ…、レベル1の女の子のパンチが効くわけないだろ…!』
『ひゅう、さすが私の見込んだマスター♥
強がりだとしてもそういうガッツあるところ大好きですよ♥』
マルタさんが再び俺に向かってファイティングポーズを取る

シックス
セブン
ハァ
ハァ
グッ
グッグッ…
ハァ…
『フォー、ファイブ…』私の数えるカウントが進む
マスターは痛みをこらえながらリングに手をついて立ち上がった
『シックス、セブン…。やっぱり立ち上がれましたね♥』
『ハァ…、ハァ…』マスターが私の目を見ながらファイティングポーズを取る
『まだまだ闘志充分ですね、そういうところが好きですよ、マスター♥』
(その不屈さ…、私のパンチで叩き潰してあげますよ♥)
『でも私に敵わないって思ったら、私に令呪使ってもいいんですよ?
もっとハンデあげないと私には敵わないんじゃないですか?』
『何言ってるんだよ…、レベル1の女の子のパンチが効くわけないだろ…!』
『ひゅう、さすが私の見込んだマスター♥
強がりだしてもそういうガッツあるところ大好きですよ♥』
私は再びマスターに向かってファイティングポーズを取る

ビッ
ビッ
バシッ
バシッ
バシッ
バシッ
バシッ
バシッ

試合が再開すると息もつかせずマルタさんが攻めてくる
シッ！シッ！バシッ！バシッ！
とにかくガードを固めてマルタさんのパンチの嵐に耐える
バグッ！バズッ！
（このまま一気に仕留める気か……！）
バシッ！バスッ！シッ！シィッ！
マルタさんの左右の連打に打たれている腕がまるで重い棒のように感じる
（でも必ずこの連打の最後に機会が来るはず…）
マルタさんのラッシュの打ち終わりまで耐えられた相手はいなかったから…！）

ミシッ
ミシッ
バシッ
バシッ
バズッ

試合が再開すると私はマスターに息もつかせず攻めていく
『シッ！シッ！』『バシッ！バシッ！』
とにかくガードを固めて私のパンチの嵐に耐えるマスター
（優しくこのまま一気に仕留めてあげますよ…！）
『バシッ！バシッ！』『シッ！シィッ！』
私の左右の連打に打たれているマスターの腕が
みるみる痣でどす黒くなっていく
（ガマンしたって辛くなるだけですよ。
私のラッシュの打ち終わりまで
耐えられた相手はいないんだから…！）
シッ
シッ
バシッ
バシッ
バスッ

マルタさんのコンビネーションを締める右ストレートが
目の前に飛び込んでくる
だがマルタさんの踏み込む呼吸に、俺はその気配を読んでいた
マルタさんのグローブが後ろ髪をかすめて焦がしながら
ギリギリでマルタさんの右ストレートをタッキングで躱す
これをまともにガードで受けていたら
両腕のガードごと腕を弾き飛ばされていただろう
すぐ上で決定打のパンチを避けられたマルタさんが息を飲む音が聞こえる
(ここだ…!)
千載一遇のチャンスをつかむべく俺は左腕に力を込める

（このままガードをこじ開けてとどめを叩き込んであげるっ！）
私のコンビネーションを締める右ストレートを
マスターの両腕に向けて叩き込む
しかしそのパンチは手ごたえを残さず、
私のグローブはマスターの後ろ髪をかすめて焦がし
マスターはギリギリで
私の右ストレートを
ダッキングで躱していた
これをまともにガードで受けさせていたら
両腕のガードごとマスターの腕を弾き飛ばしていただろう
大振りのパンチを避けられて私は思わず息を飲む
（やられる…！）
マスターを仕留めるはずが逆に千載一遇のチャンスを与えてしまった

ドガッッ!

体勢を崩したマルタさんの顔面に向けて
左フックを打ち込む バグッ!!!
グローブに確かな感触を感じながら
俺は思い切り左腕を振り抜いた
マルタさんの長い髪がたなびき
汗の光の玉と甘い匂いがあたりに飛び散る

体勢を崩した私の顔面に向けて
マスターの左フックが打ち込まれる
バグッ!!!
マスターの硬い拳の感触を感じながら
私は振り抜かれたパンチに顔を弾き飛ばされる
私の長い髪がたなびき
視界には汗とよだれの光の玉があたりに飛び散る
ドガッッッ!

ボカッ

続けざまにコンビネーションの右フックをマルタさんの左頬に打ち込む
ボグンッ!!!（マルタさんに教えてもらったコンビネーションだ…!）
体に染みついた動きがよどみなく行われ、
俺の右拳が柔らかいマルタさんのほっぺたに沈み込んでいく
ボグンッ
拳にマルタさんの頬骨の感触が伝わり
潰されたマルタさんの唇から再びよだれの玉がしぶく

続けざまにコンビネーションの右フックが私の左頬に打ち込まれる
ボグンッ!!!
(これ…私が教えてあげたコンビネーションじゃない…!)
マスターの体に染みついた動きがよどみなく行われ、
彼の右拳が私のほっぺたに沈み込んでいく
ボグッ
頬骨にマスターの拳の感触が伝わり
潰された私の唇から再びよだれの玉がしぶく

うぐ…っ
ぶはっ

（俺はいつだって強いマルタさんを見てきた…！）
「マルタさんの打ってきたコンビネーションはちゃんと知ってる…！凄さも威力も、どの角度、どのタイミングで打つのかも…！」
（と言ってもマルタさんがパワーダウンしてなかったら本当は俺にはどうすることもできないのだけれど…）
うぐ…っ
ぶはっ
「うぐっ…」マルタさんの顔からグローブを引き抜くとマルタさんが苦悶の表情を覗かせる
（ずるい…、マスターがいつもそんなふうにちゃんと私の事見てくれたなんて言われたら…、嬉しくてゾクゾクしちゃうじゃない…っ♥）
俺のパンチにマルタさんが身体ごと後ろにグラつく
「でも今は…、マルタさんに届く…！ 俺のパンチが届く…！だからカの差を理解したその上で…俺はマルタさんに勝ちたい…！」
（もう一発…！）
俺はそのままマルタさんに教えてもらったコンビネーションの締めを打ち込むべく、半歩踏み込んで体重を再び右拳に乗せる

（くうっ…、効いたぁ…！）
『マルタさんの打ってきたコンビネーションはちゃんと知ってる…！凄さも威力も、どの角度、どのタイミングで打つのかも…！』
（えっ…、私の動きが読まれていた…？）
うぐ…っ
ぶはっ
『うぐっ…』
私の顔面からマスターのグローブを引き抜かれると思わず声が出てしまう
（ずるい…、マスターがいつもそんなふうにちゃんと私の事見ててくれたなんて言われたら…、嬉しくてゾクゾクしちゃうじゃない…っ♥）
マスターのパンチに私は身体ごと後ろにグラついて半歩後退する
『でも今は…、マルタさんに届く…！ 俺のパンチが届く…！だから力の差を理解したその上で…俺はマルタさんに勝ちたい…！』
（もう一発来る…っ！）
マスターはそのまま私が教えてあげたコンビネーションの締めを打ち込むべく、半歩踏み込んで体重を再び右拳に乗せる

ぶぶっ!?

俺は半歩踏み込んだ渾身の右ストレートをタメ押しにマルタさんに叩き込む
グシャッ!!
反響した重い打撃音がリングに響く
ぶぐっ!?
ブシュッ
ブシュッ
『ぶぐっ!?』
それは出所を異にする、二重に重なった打撃音だった
右ストレートを振り切ると同時に俺の右頬に熱く重たいものが突き刺さる。
俺の右ストレートを貰いながらも
俺のコンビネーションの締めを読んでいたマルタさんが
左ストレートを打ち返してきていたのだ。
『自分が教えたパンチで…やられるわけにはいかないってのの…っ!』
お互いの汗とよだれが花火のようにリング上に飛び散る

マスターはよろけた私に半歩踏み込んだ渾身の右ストレートをダメ押しに打ち込んでくる
グシャッ!!
反響した重い打撃音がリングに響く
ぶぐっ!?
ブシュッ
『ぶぐっ!?』
それは出所を異にする、三重に重なった打撃音だった。
マスターのコンビネーションの締めを読んでいた私は
私の左頬にマスターの右ストレートが打ち込まれると同時に
私はマスターに左ストレートを打ち返していたのだ。
『自分が教えたパンチで…やられるわけにはいかないっての…っ!』
お互いの汗とよだれが花火のようにリング上に飛び散る

ぶぶっ…
ぐぅ…
ゴロッ
グラッ

ぶぷっ…
うぐっ…
お互いにお互いのパンチを味わい、両者ともに体勢を崩してわずかに距離が開く
（効いた…、マルタさんのカウンターパンチ…でも俺のパンチもマルタさんに効いているはず…！）
俺は一刻も早く傾いた身体を立て直そうとする
ぶぷっ…
うぐっ…
グラッ
コロッ

『ぶぷっ…』『うぐっ…』
お互いにお互いのパンチを味わい、
両者ともに体勢を崩してわずかに距離が開く
ぶぷっ…
グラッ
うぐっ…
ヨロッ
〈やるじゃない、マスター…
さすがに連続で貰ったからちょっと効いた…っ〉
私は傾いた身体をすぐさま立て直す

マルタさんが俺より一瞬早く体勢を立て直しながらの左アッパーを繰り出す。
『このっ！』
ぐらついた身体を立て直せないままの俺は甘んじてマルタさんのパンチを受けるしかなかった
ガゴンッ！！『く…、おっ…』
強烈な左アッパーにアゴ先を天井に向けて吹き飛ばされる
（マズイ、完全に脳を縦に揺らされた…！）
足元がチ鳥足になりダウンを免れそうにない

私はマスターより一瞬早く
体勢を立て直しながらの左アッパーを繰り出した。
『このっ！』
ぐらついた身体を立て直せないままのマスターは
甘んじて私のパンチを受け入れるしかなかった
ガゴンッ！！『く…、おっ…』
私の強烈な左アッパーにマスターは
アゴ先を天井に向けて吹き飛ばされる
（完璧な手ごたえ…！意識の糸、いただきっ♥）
マスターは足元がチ鳥足になり
ダウンを免れられないだろう

はあ、
はあ
ふー、
ふー、
ぐにゅ
ズリュッ
にゅぐぐっ
はあ
はあ
ぐッ
ぎゅぅ
ぐにゅぐにゅ
ぐにゅぐにゅ

(ダウンさせられる…!)
マルタさんの強烈なアッパーカットに脳を揺さぶられ
歪む視界と落ちていく膝に抗いながら目の前のマルタさんに
必死に抱きついてダウンを免れる
はあ
はあ
グッ
ムニュ
ムニュ
ふー
ふー
グニュ
ズリュッ
にゅるっ
はあ、
『うう…っ…』『ふう…、ふうっ…』
お互いが荒い息をつきながらもマルタさんは
俺をそのままコーナーに押し込んでいく
(マルタさんのおっぱいが…)
俺の胸と密着し、押し付けられるたびにむにむにと形を歪める。
俺はマルタさんの感触に包まれて
思わず涙りだした股間の膨張が止まらなくなってしまった

(ダウンね…♥)
私の強烈なアッパーカットにマスターは脳を揺さぶられ膝が落ちていく。だが必死に一歩踏み出してダウンを拒みそして私にクリンチをしてダウンを免れた
(しぶといのね、マスター…♥)
はあ
グッ
ムニュ
ムニュ
ふーー
グニュ
ズリュッ
にゅるっ
はあ、
ふっ…っ…ふーー、ふう…、ふう…、ふう…
お互いが荒い息をつきながらも私は私はマスターをそのままコーナーに押し込んでいく
(逃げ場のない所で料理してあげる♥)
私とマスターの胸が密着し、押し込むたびにむにむにと私のおっぱいが形を歪める。私はそうしているうちにマスターの股間が膨張し私の股座へと押し付けられるのを感じていた

あぁう……
あっ
ビク
ビク
ぐりっ♥
ぐりっ♥
ビクッ
ぷりっ
ぷりっ

「もう…、ダメじゃないですかマスター…♥」
「こんなに硬くなってちゃ、私とボクシングなんてできませんよ…?」
俺を抱きしめながら優しく耳元でささやくマルタさん
だが俺のペニスはもうマルタさんの感触に耐えられず
がっちがちにフル勃起してしまった
「こんなにおっきくしちゃって…、試合中なのにダメなマスターさん♥」
マルタさんが俺をコーナーポストに押し付けてから少し身を離すと
マルタさんのグローブが俺のペニスの先っちょを包み込んでぐりぐりと刺激する
「あっ…♥ ああっ…♥」
思わず身を固くするほどの快感が背筋を走る
「私でそんなに興奮してくれるのは嬉しいですけど…仕方ないわよねえ…
…少し荒っぽくしますよ♥」
マルタさんがグローブをギュッと握り込む音が聞こえた
ぎゅ
ぎゅ
ぎゅ
ビク
ビク
ビク

ビク
ぎゅっ
ぐり
ぐり
ぎゅっ
ぎゅっ
ぎゅっ
『もう…、ダメじゃないですかマスター…♥』
『こんなにおっきくしちゃって…、試合中なのにダメなマスターさん♥』
『こんなに硬くなってちゃ、私とボクシングなんてできませんよ…?』
マスターを抱きしめながら優しく耳元でささやく
マスターのおちんちんは目を見紛うほど巨大でがっちがちに勃起してしまっていた
私はマスターをコーナーポストに押し付けてから少し身を離すと
グローブでマスターのおちんちんの先っちょを包み込んでぐりぐりと刺激する
(クリンチでブレイクこれないから
なかなか離れられなくて…
『あっ…♥』『ああっ…♥』
私までちょっと濡れてきちゃった…♥)
『私でそんなに興奮してくれるのは嬉しいですけど…仕方ないわよねえ…
…少し荒っぽくしますよ♥』
甩わずマスターが快感がで身を固くする
私はマスターのおちんちんをいたずらしたグローブを腰だめにして
グローブを固く握り締めた

カ
ッ
ブ
ッ
キ
ッ
ス
ッ
!!
デンッ
ぶっ!

カッ
ドッ
ボッ
ブンッ
ぶっ!
「ふっ!」
マルタさんのアッパーカットが俺の顎を貫通し
そのまま天に向かって突き立った。
俺の足の裏がリングから離れ
脳天に稲妻が落ちたような衝撃が突き抜ける。
同時に目の前が真っ暗になった
ガッコオオンッ!

カッ
ドッ
ゴオ
ゾッ
ズシィッ
ぶっ!
「ふっ!」ガッコオオンッッ!!
私のアッパーカットがマスターの顎を吹き飛ばし
そのまま天に向かって突き立った。
マスターのマウスピースが天井に向かって発射されると
マスターも足の裏がリングから引き離され
小さくジャンプすると
そのままリングに尻もちをつくように崩れ落ちた

ぼとっ、ころころという音を立てて
さっき口の中からアッパーカットで
吹き飛ばされたマウスピースがリングに落ちてきて
マルタさんの足元にみじめに転がった。
『どうですか？　これで上半身と下半身が分断されて
下半身が落ち着いたでしょう？』
俺の亀頭を揉みもみして刺激を与え、
快感をもたらしたマルタさんのグローブは
そのまま次の瞬間に俺のアゴに激痛をもたらしていた…。
『ではカウントを入れますから
その間に立ち上がってくださいね、マスター♥
わーん、つー、すりー！…』
このアッパーカットは
二連続で貰ってはいけないパンチだった…！
膝が完全に笑って立ち上がることができない…。

ぼとっ、ころころという音を立てて
マスターの口の中から私のアッパーカットで
発射されたマウスピースがリングに落ちてきて
私の足元にみじめに転がった。
『どうですか？　これで上半身と下半身が分断されて
下半身が落ち着いたでしょう？』
彼のいきり立った男根を
弄んだグローブで、私はそのまま次の瞬間に
彼のアゴに激痛という罰を与えたのだ。
『ではカウントを入れますから
その間に立ち上がってくださいね、マスター♥
わーん、つー、すりー…』
このアッパーカットが効きすぎたのか
マスターは膝が完全に笑って
立ち上がることができないでいる…。

すりーふぉー
しーっくすふぁーいぶ

『ふぉー、ふぁーいぶ、しーっくす…』
マルタさんが弾む声で俺にカウントを着々と告げてくる。
目の前で見下ろすマルタさんの足元で尻もちをついてダウンする俺は立ち上がろうと足に力を込め、両のリングロープを両足につけて踏ん張るが立ち上がる力が入らず、立ち上がることができない…
すりー
ふぉー
『このまま負けちゃうんですか？私に勝ってSEXするつもりであんなに大きくしてたんじゃないんですか？そのままカウントアウトしちゃったらがっかりですよ？』
ふぁーいぶ
目の前のマルタさんがぼやけて見える。自分の不甲斐なさに、悔しさで泣きたくなってきた…
『しゃんとして！私を抱きたかったら、立ち上がってかかってきなさい！』
倒すべき相手であるマルタさんに目の前で一喝されてしまった…

すりー
ふぉー
『このまま負けちゃうんですか？
私に勝ってSEXするつもりで
あんなに大きくしてたんじゃないんですか？
そのままカウントアウトしちゃったらがっかりですよ？』
どうしようもなく悔しそうな顔を私に見せるマスター…
『しゃんとして！
私を抱きたかったら、立ち上がってかかってきなさい！』
捨てられた子犬のような顔をするものだから
マスターを思わず目の前で一喝してしまった…
『ふぉー、ふぁーいぶ、
しーっくす…』
（ここまで食い下がってくるとは
正直思っていなかったな…）
強くなったマスターに、
私は思わず弾む声でカウントを入れてしまう。
私の目の前で立ち上がろうと足に力を込め、
両グローブをリングにつけて踏ん張るものの
両足に力が入らず、
一向に立ち上がることができないマスター…。
（まだ終わってほしくないな…。
もっとマスターと殴り愛したい…♥）

ぷーっ
ぷーっ
ぷるぷる
ぷるぷる
ぷる
ギュッ

「せぶーん、えーいと…」
「う……、うううっ……」泣きそうな声を上げながら
コーナーマットに背をつけて、ずり上がるような形で
みっともないながらもなんとか立ち上がる
「ないーん……、いいでしょう
本当ならこのままテン、ノックアウト♥、っていうところですけど
ちゃんと立ち上がってきたんでまだ試合続行してあげますよ」
おまけでマルをもらった気分になるがいまだ足元はおぼつかない…。
「でもこのままじゃ膝を差し入れてないと
またダウンしちゃいますね？
このラウンドでもう一回ダウンしちゃったら、
今度こそTKOでマスターの負けになっちゃいますよ
それならこのまま私の膝の上で休んでいたい？」
ギュッ
ぶーっ
ぶるぶる
ブル
ぶるぶる
ぶーっ
実際マルタさんが俺の股に膝を差し入れてなかったら
いつ倒れこんでしまうかわからないような状態だ。
それでもマルタさんにボコボコの顔を覗き込まれて、いやいやと頭を振る
「ふっ…マスターのグロッキーな顔、目の前でガン見…♥
このままじゃレベル1の女の子にボクシングで負けちゃいますよ？
反撃…しなくちゃいけないでしょう？　ほら、腕を上げて…♥
私をノックアウトしてください、マスター♥」

『せぶーん、えーいと…』
『う……、うぅぅ……』マスターが泣きそうな声を上げながら
コーナーマットに背をつけて、ずり上がるような形で
『ないーん……、いいでしょう』みっともないながらもなんとか立ち上がる
本当ならこのままテン、ノックアウト♥、っていうところですけど
ちゃんと立ち上がってきたんでまだ試合続行してあげますよ』
マスターの股座に膝を差し入れて
今にも崩れ落ちてしまいそうなマスターの顔を覗き込む…。
『でもこのままじゃ膝を差し入れてないと
またダウンしちゃいますね？
このラウンドでもう一回ダウンしちゃったら、
今度こそTKOでマスターの負けになっちゃいますよ
それならこのまま私の膝の上で休んでいたい？』
ぎゅっ
ぶーっ
ぶーっ
ぶるぶる
ぶるぶる
ぶるぶる
（こんなこと言われちゃったら悔しくて仕方ないですよね？）
私にボコボコの顔を覗き込まれて、マスターはいやいやと頭を振る
『ふふっ…マスターのグロッキーな顔、目の前でガン見…♥』
このままじゃレベル1の女の子にボクシングで負けちゃいますよ？
反撃…しなくちゃいけないでしょう？　ほら、腕を上げて…♥
私をノックアウトしてください、マスター♥』
（マスターにノックアウトされるのも、マスターをノックアウトするのも
本音はどちらも捨てがたい♥）

ドスッ
んんっ
んっ
ぷしっ
ぷしっ
ぷしっ
バスッ

『ここまで私のパンチに耐えられるなんて思いませんでしたよ』
（そうだ…ここまであのマルタさんのパンチを食らってまだ立っていられるじゃないか…！）
今までマルタさんに俺のパンチの効き目が薄かったのはマルタさんの強打にビビって無意識に腰が引けていたからだ。
ここまで一方的にボコボコにされてようやく腹が据わった
（マルタさんと真正面から殴り合って…勝つ…！）
再びマルタさんにパンチを打ち込む胆力が、心の奥底から湧き上がってくる
ひとつ…、ぺちっとマルタさんにボディを返す
『んっ♥』（よし、指も腕も動く）
ふたつ…、ぼすっ！（足先もふくらはぎも動く）
『んっ♥』
ふーっ
ふーっ
んっ
んっ
ゆさっ
ゆさっ
みっつ…、バスッ！
『ダメですよ、こんな弱々しいボディじゃあ…』（肩も太腿も動く）
よっつ…、ドスッ（腰も、握力も力が戻ってくる…）
『残念ですけど、ここまでかな？』
じゃあドドメ♥刺しちゃいますね、マスター♥』
ぎちっ…！とグローブが握りしめられる音が聞こえる
だがそれはマルタさんのグローブだけでなく
俺のグローブからも同じ音がした

『ここまで私のパンチに耐えられるなんて思いませんでしたよ』
（まあマスターもこんなにがんばったんだから最後に気持ちよくK○してあげて、ごほうびあげてもいいかな♥）
ここまで私にボコボコにされてマスターはまだやる気があるようだ
（マスターのこういうところが好きなのよね…♥）
股に挟ませていた私の太ももを引き抜いてもしっかり立っている
すると…、ぺちっとマスターは私にボディを返す
『んっ♥』（必死な顔…♥）
ぼすっ！（子供のパンチみたい♥）
『んんっ♥』
ふーっ
ふーっ
んっ
んんっ
ゆさっ
ゆさっ
（うくん…）
『ダメですよ、こんな弱々しいボディじゃあ…』
『残念ですけど、ここまでかな？』
じゃあドドメ♥
刺しちゃいますね、マスター♥』
バスッ！
ドスッ
ぎちっ…！！とグローブが握りしめられる音が聞こえる
だがそれは私のグローブだけでなくマスターのグローブからも同じ音がしていた

ぶふっ!?
ぶちゅ
ぶちゅ
メリ
ボキ
!!!ッ

『フンッ……!』
裂帛の気合と共に体重を乗せ
左ボディをアッパー気味にマルタさんに打ち込む
俺のグローブがマルタさんの腹筋を突き破って
内臓まで届いた感触とぐちゅっとした水音
マルタさんは思わず目を見開いて前のめりになり
お尻をびくっと震わす
ドボォッ!!
『ぶふっ!?』
ぶふっ!?
ぐちゅ
ぐちゅ
ボキ
!!ッ

『フンッ……!』
『ドボォッ!!』
『ぶふっ!?』
マスターが裂帛の気合と共に体重を乗せ
左ボディをアッパー気味に私のお腹に撃ち込んだ
彼のグローブが私の腹筋を突き破って
内臓まで届いた感触とぐちゅっとした水音…
マスターのボディアッパーの衝撃が
みぞおちから背骨を抜けて背後まで突き抜けて行った
私は思わず目を見開いて前のめりになり
お尻をびくっと震わす
ぶふっ!?
ぐちゅ
ぐちゅ
!!!ッ

プル
ぐぷっ…!
ぐリッ!!
ポタ
ポタ
プル
ビクッ

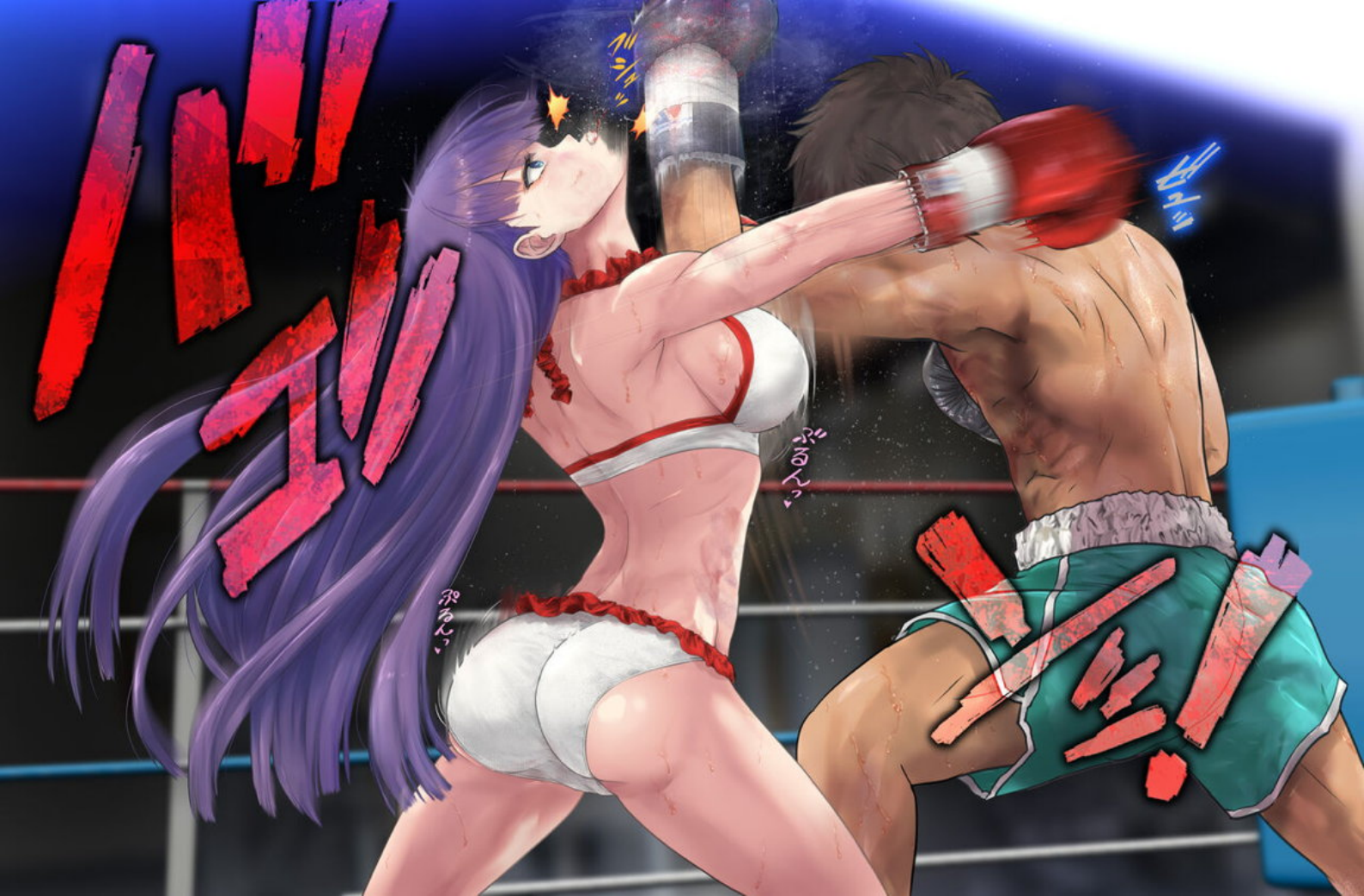
俺の拳をお腹の奥まで突き入れられて
マルタさんの身体が硬直する。「ぐぷっ…！」
マルタさんの口元から押し出された液体がリングへとぽたぽたと落ちてい
（なんだ…やっぱり届く…。俺のパンチはマルタさんにちゃんと届いてる…！）
マルタさんに押し込んだグローブにかがこもる
ぐぷっ…！
グリッ…
ぽた
ぽた
プル
プル
どクッ

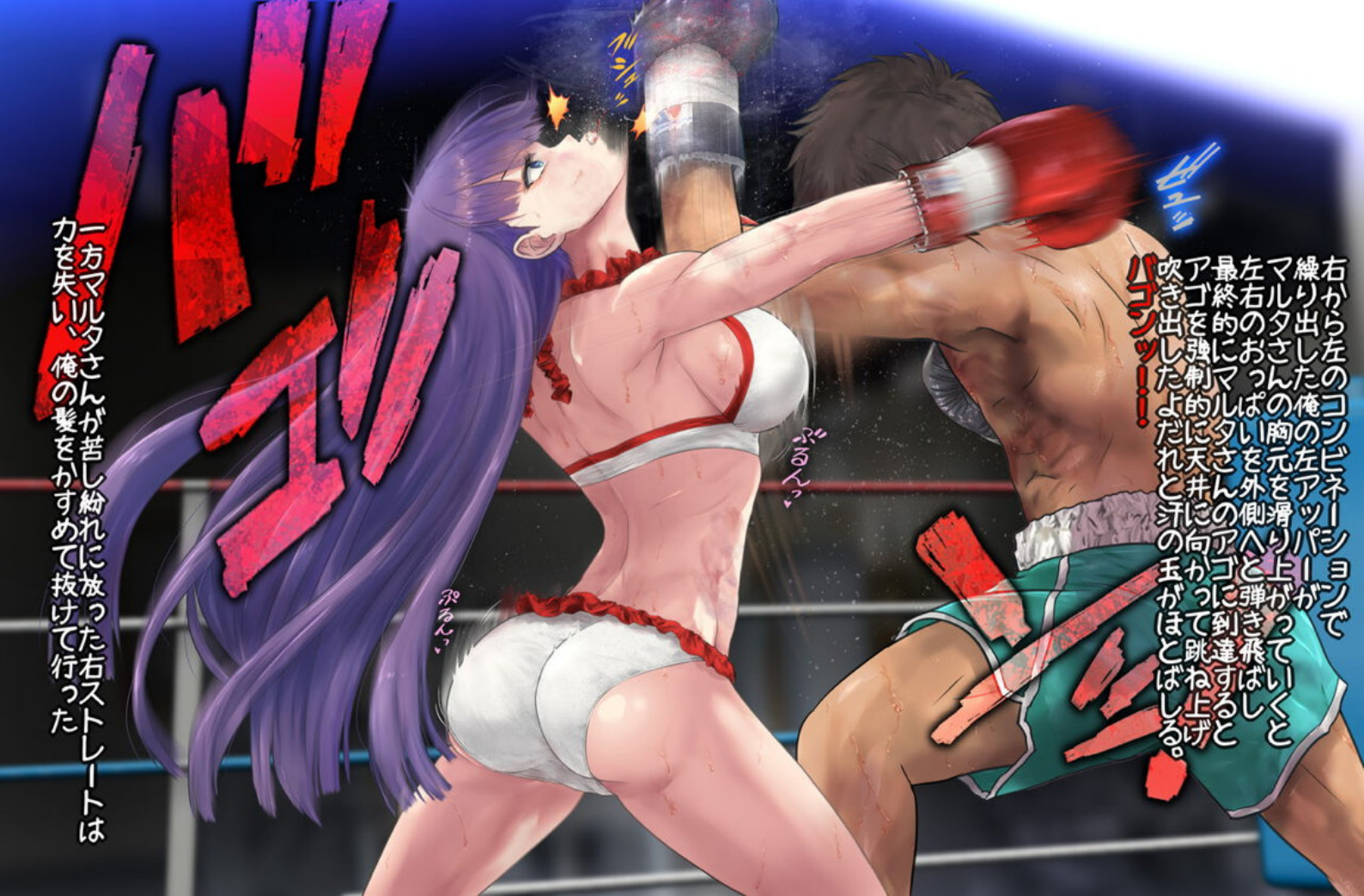
私はマスターの拳をお腹の奥まで突き入れられて
身体を硬直させられてしまう
「ぐぷっ…！」
私の口元から押し出された液体がリングへとぽたぽたと落ちていく
（何…？　マスターにまだこんなパンチを打つ気力があったの…！？）
私にぐりぐりと押し込まれたグローブにカがこもる
ぐぷっ…！
グリッ…
ポタ
ポタ
プル
プル
ビクッ

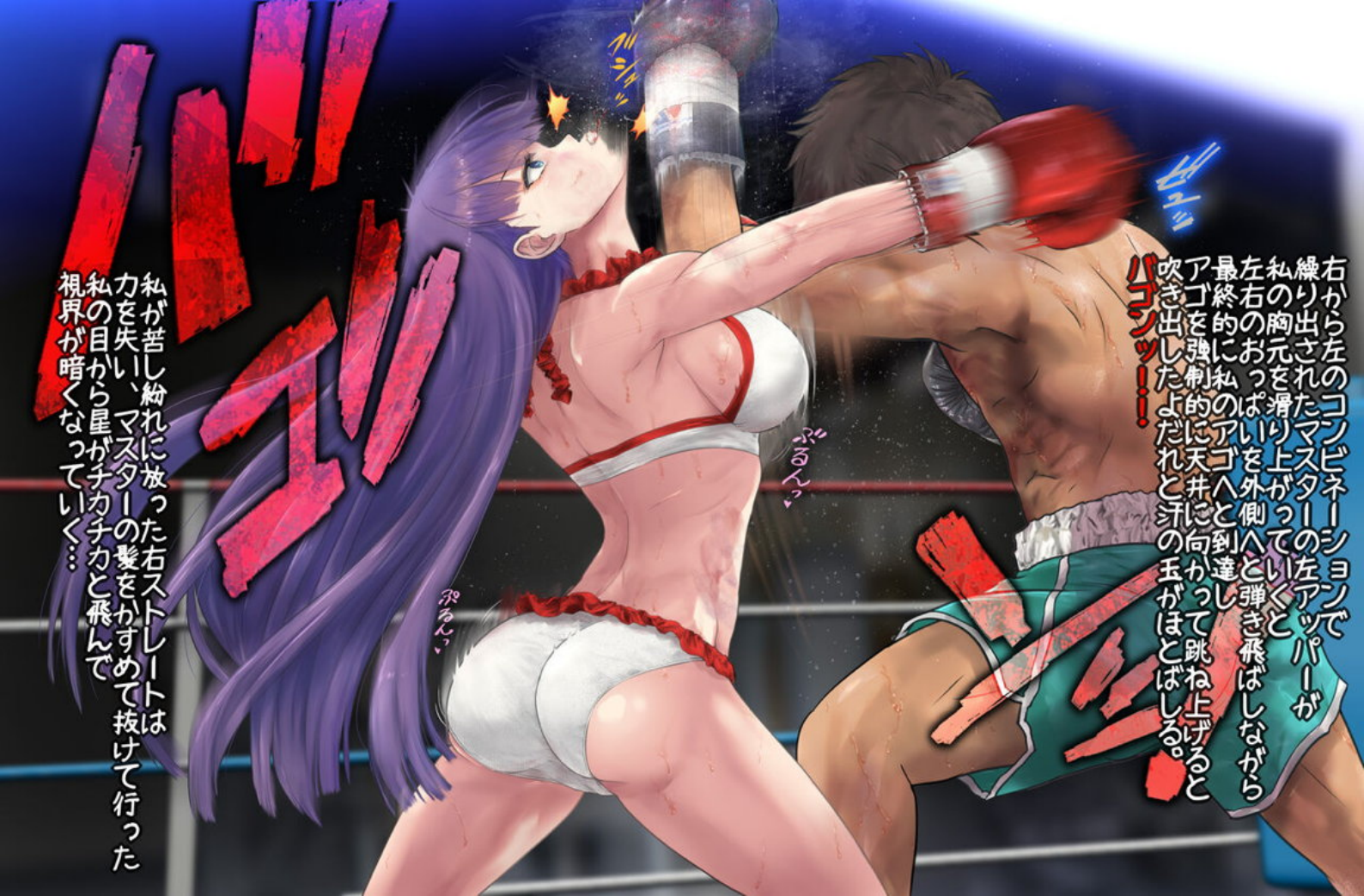
ぶるぶるっ

俺のパンチをお腹に埋めたまま反撃の気配を見せるマルタさん。
だが俺は流れを奪わせずそのまま右フックを
マルタさんの顔めがけて放つ
「ふっ！」
マルタさんの右拳が動く、
だが左ボディの入れ替わりに打ち込んだ
俺の右フックが
マルタさんの顔を左側へ弾き飛ばした
ぶるんっ
ぶぐぉっ!?
バグンッ!!
「ぶぐぉっ!?」
グローブの革が弾ける音と共に
マルタさんの長い髪が扇状に広がり、
汗の玉に混じってマルタさんの髪の
いい香りがあたりに撒き散った

ぶぐぉっ!?
ぶるんっ
私はせりあがってくる嘔吐感をマウスピースと共に無理矢理体内へ押し戻して反撃のパンチを打ち返そうとする
(このくらいでケツ捲ってなんかいられないでしょ…っ!)
私は右拳をマスターの顔面に返そうと腕を振るっ
だがマスターの左ボディの入れ替わりにマスターの右フックが私のパンチより早く私の顔を右側へ弾き飛ばした
バグンッ!!
ぶぐぉっ!?
グローブの革が弾ける音と共に私の長い髪が扇状に広がり、汗の玉とボディで口中に溜まったよだれをリングへと吹き飛ばす


バコッ
ぷるんっ


右から左のコンビネーションで繰り出した俺の左アッパーがマルタさんの胸元を滑り上がっていくと左右のおっぱいを外側へと弾き飛ばし最終的にマルタさんのアゴに到達すると
アゴを強制的に天井に向かって跳ね上げ吹き出したよだれと汗の玉がほとばしる。
バゴンッ!!!
ぶるんっ
ぶるんっ
一方マルタさんが苦し紛れに放った右ストレートは力を失い、俺の髪をかすめて抜けて行った


右から左のコンビネーションで繰り出されたマスターの左アッパーが私の胸元を滑り上がっていくと左右のおっぱいを外側へと弾き飛ばしながら最終的に私のアゴへと到達しアゴを強制的に天井に向かって跳ね上げると吹き出したよだれと汗の玉がほとばしる。
バゴンッ!!!
ぶるんっ
ぶるんっ
私が苦し紛れに放った右ストレートは力を失い、マスターの髪をかすめて抜けて行った
私の目から星がチカチカと飛んで視界が暗くなっていく…

ガクッ
ガクッ
ガクッ
ぁぐ…っ…
ぶろん
だらん

俺のアッパーでアゴをカチ上げられたマルタさんの膝がガクガクと笑うガードがだらりと落ち、

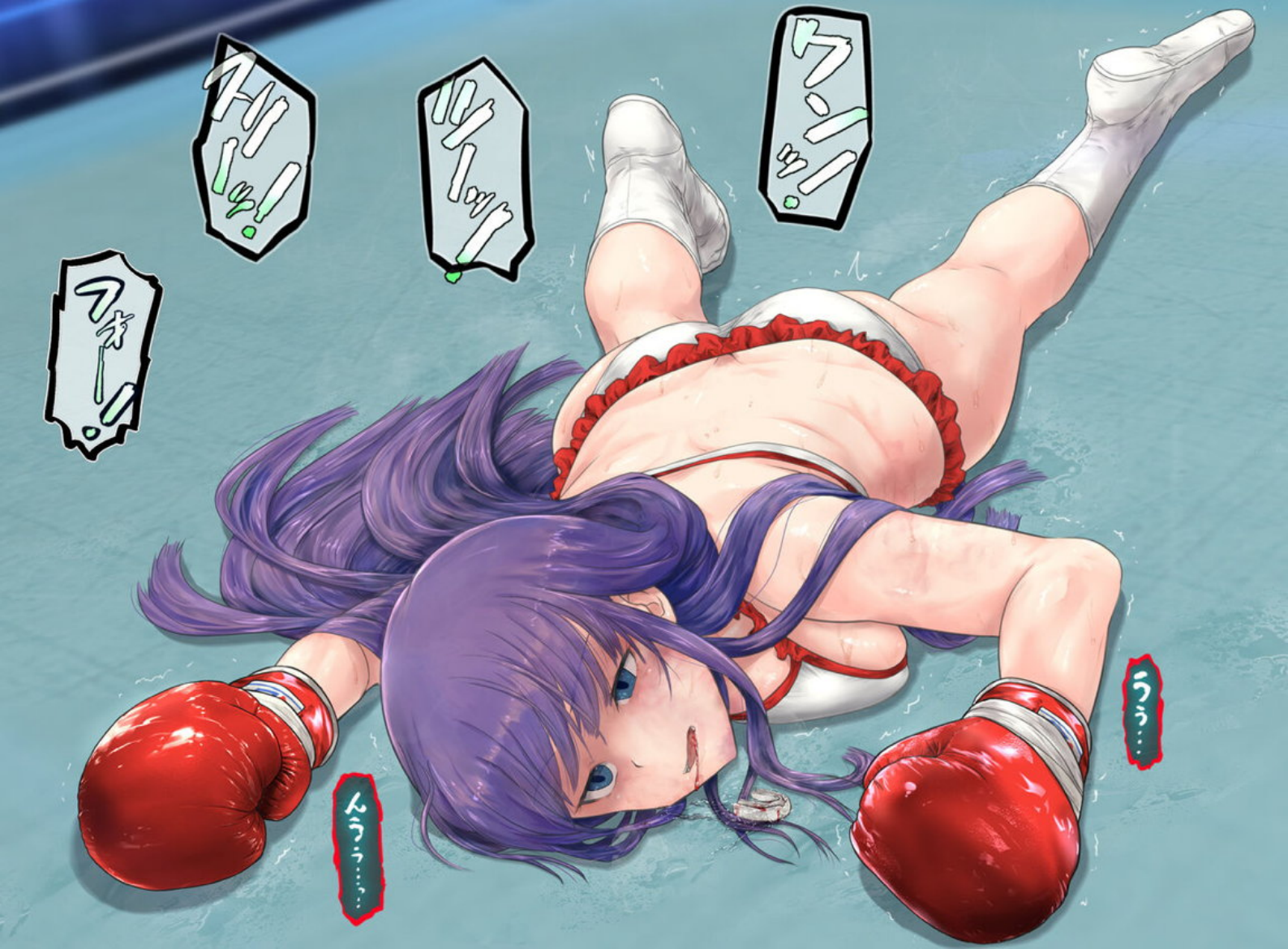
あぐ…っ…

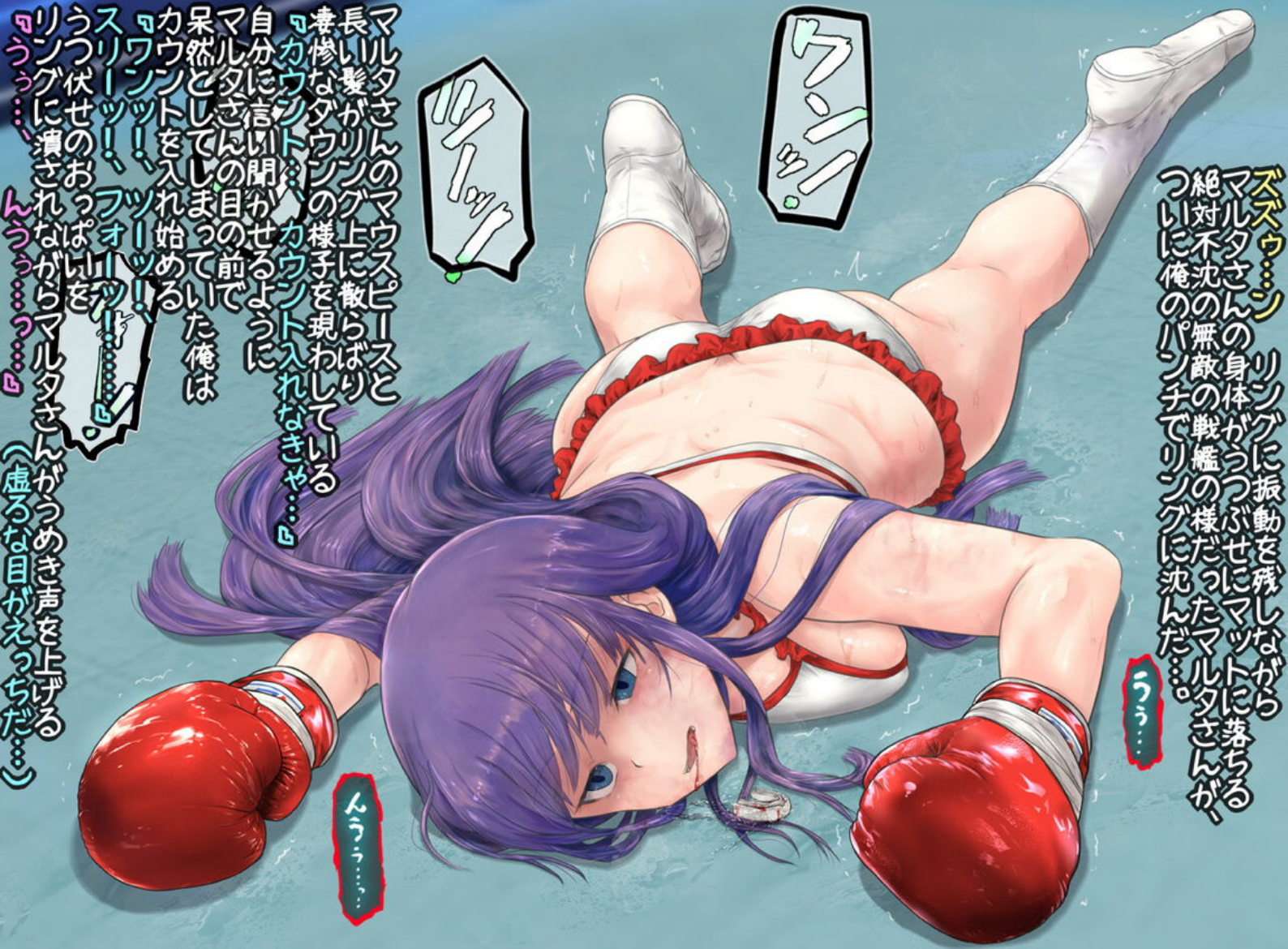
マルタさんがぐらりと前のめりになるとそのまま力なくマウスピースを口の中からリングへと落した

マスターのアッパーでアゴをカチ上げられた私のガードはだらりと落ち、膝がガクガクと笑う

あぐ…っ…

私の身体がぐらりと前のめりになるとそのまま力なくマウスピースを口の中からリングへと落した


ブンッ!
ブンッ!
ブンッ!
ブォー!
うう…
んうう……

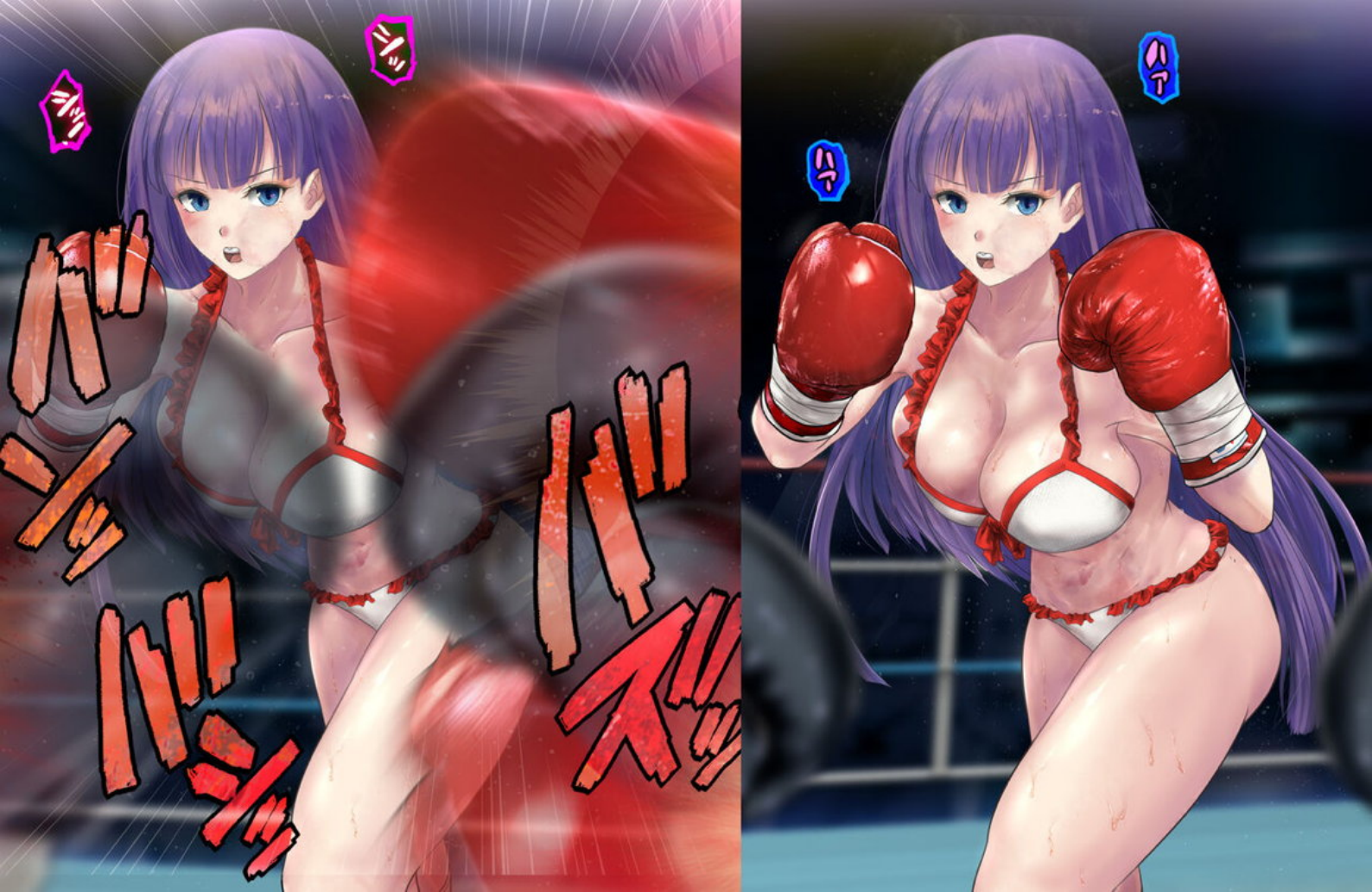

ズズゥ…ン
リングに振動を残しながら
マルタさんの身体がうつぶせにマットに落ちる
絶対不沈の無敵の戦艦の様だったマルタさんが、
ついに俺のパンチでリングに沈んだ…。
ワンッ!
ツーッ!
うぅ…
んぅぅ…
マルタさんのマウスピースと
長い髪がリング上に散らばり
凄惨なダウンの様子を現わしている
「カウント…、カウント入れなきゃ…」
自分に言い聞かせるように
マルタさんの目の前で
呆然としてしまっていた俺は
カウントを入れ始める
「ワンッ!、ツーッ!、フォーッ!…」
うつ伏せのおっぱいを
リングに潰されながらマルタさんがうめき声を上げる
(虚ろな目がえっちだ…)
「うぅ…、んぅぅ…っ…」

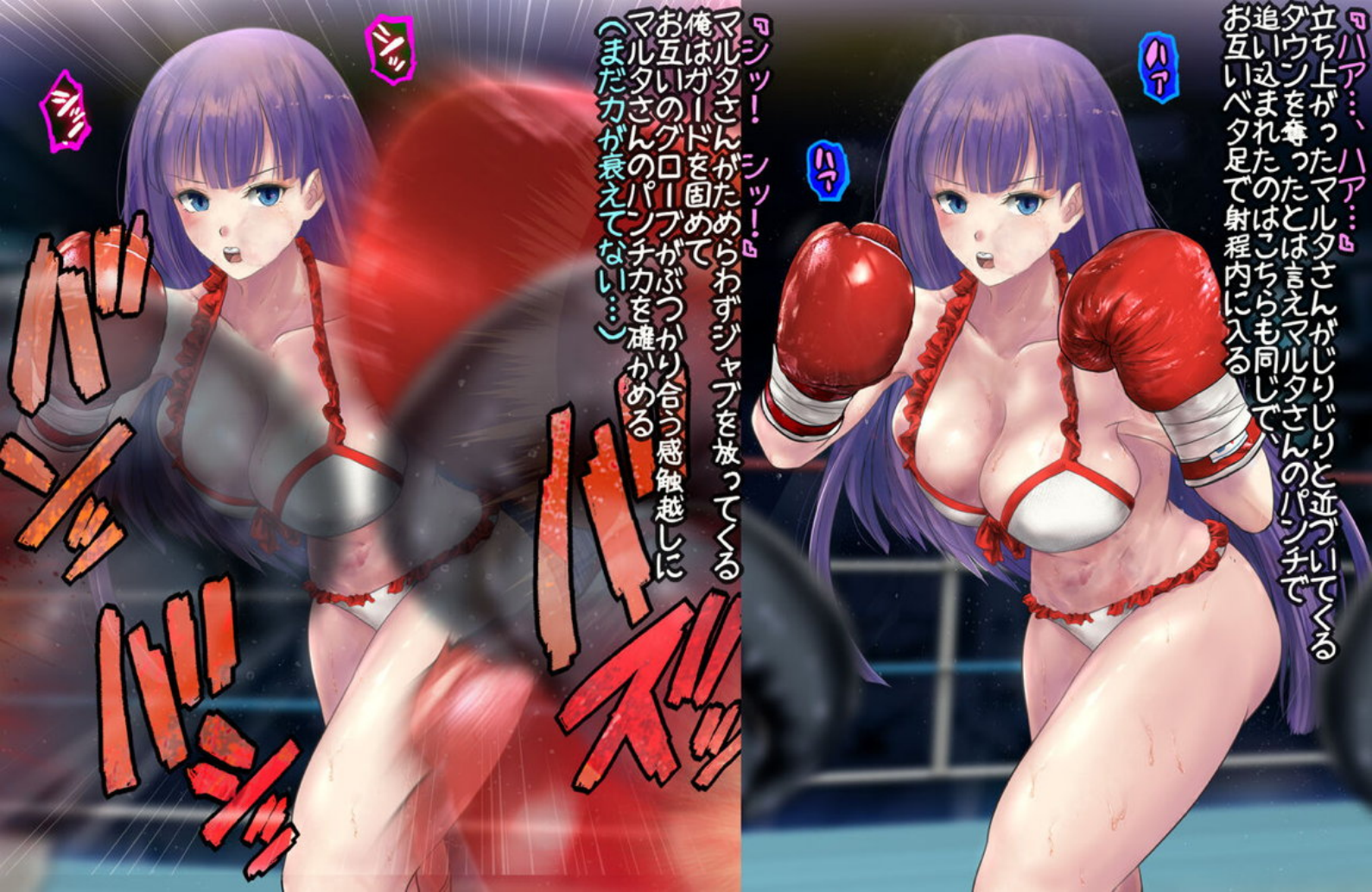
ズズゥ…ン
リングに振動を残しながら
私の身体がうつぶせにマットに落ちた。
とうとうマスターのパンチに耐えられず、
私はキャンバスを舐めさせられたのだ…。
うぅ…
ウンッ!
んうぅ……
リーッ
私のマウスピースと
長い髪がリング上に散らばり
凄惨なダウンの様子を現わしている
「カウント…、カウント入れなきゃ…」
私の目の前で
呆然としてしまっていたマスターは
自分に言い聞かせるように
カウントを入れ始める
「ワンッ!、ツーッ!、
スリーッ!、フォーッ!……」
うつ伏せのおっぱいを
リングに潰されながら私はうめき声を上げる
「うぅ……んうぅ……」
(リング…、冷たい…)
私はほっぺたに当たる冷たい感触で意識を取り戻した

はーっ
はーっ

『ファイブ！、シックス！……』
そこまでカウントを数えるとマルタさんが腕をついて体を起こす
『はーっ、はーっ、はーっ……、くっ、効いたあ……』
マルタさんが俺のアッパーに打ち抜かれた顎をさすりながら俺を見上げる
『セブン！……』
は――っ
は――っ
『はい、そこまでよ。今度は私がマスターをぶっ飛ばしてやるから』
そう言うとマルタさんはマウスピースを拾ってすくっと立ち上がり
マウスピースをはめながら俺に向かってファイティングポーズを取った
（くそ……、今のパンチが効いてないのか…？）

『ファイブ！、シックス！……』
そこまでカウントを数えられると私は腕をついて体を起こした
『はーっ、はーっ、はーっ……、っくう…、効いたあ……』
私はマスターのアッパーに打ち抜かれた顎をさすりながら彼を見上げる
（やばっ、ちょっと意識飛んだ…。思ったよりやるわね、マスター…）
『セブン！……』
カウントがここまで進んでいるとは思わなかった
は――っ
は――っ
『はい、そこまでよ。
今度は私がマスターをぶっ飛ばしてやるから』
そう言うと私はマウスピースを拾って、あえてすくっと立ち上がり
マウスピースをはめながらマスターに向かってファイティングポーズを取った
（マスターのパンチが効いてるって悟られないように…）
ふらつきそうな足元に喝を入れて私は拳を構える


ハァ
ハァ
ハァ
ハァ


ハァ…、ハァ…
立ち上がったマルタさんがじりじりと近づいてくる
ダウンを奪ったとは言えマルタさんのパンチで
追い込まれたのはこちらも同じで、
お互いベタ足で射程内に入る
ハァ
ハァ
シッ！シッ！
マルタさんがためらわずジャブを放ってくる
俺はガードを固めて
お互いのグローブがぶつかり合う感触越しに
マルタさんのパンチ力を確かめる
（まだ力が衰えてない…）
シッ
シッ
バシッ
バシッ
バシッ

ハァ
ハァ
『ハア…、ハア…』
立ち上がった私はじりじりとマスターに近づく
ダウンを奪われたとは言え私のパンチで
マスターもかなり追い込まれているのは間違いない
お互いともにベタ足で射程内に入る
ジッ
ジッ
『シッ！シッ！』
私はためらわずマスターにジャブを放つ
マスターはガードを固めて
私の様子をうかがっているようだ
（回復するまで、
効いてるって悟られるわけには…っ）
バシッ
バシッ
バシッ

バンッ
バンッ
バンッ
バンッ
ゲッ
ハァ
ハァ
ゆさっ
ゆさっ

『シッ！ シッ！ ハァ…、シッ！ ハァ…』
バシッ！ バシッ！ バグッ！
マルタさんはジャブを打ち続けて
俺のガードを激しく叩いてくるものの
連打に息継ぎが混ざる。
（マルタさんのスタミナが切れてきているんだ…！）
俺は逆にガードを固めて下がりながら息を整える
バシッ
バシッ
バシッ
バシッ
バグッ
シッ
ハァ
ゆさ
ハァ
ゆさ
シッ

「シッ！　シッ！　ハァ…、シッ！　ハァ…」
バシッ！　バシッ！　バグッ！
私はジャブを打ち続けてマスターのガードを激しく叩いて追い詰めていくものの連打に息継ぎが混ざる。
（スタミナが切れてきてる…！それでもマスターをロープに追い詰めるまでは…）
そう思いながらパンチを繰り出しながら前へと進み続ける
バシッ
バシッ
バシッ
バシッ
バシッ
バグッ
ハァ
ハァ
ゆさ
ゆさ

うぁっ！
ふ？！

マルタさんの連打の繋ぎのタイミングに合わせて
俺は的確に反撃を試みた
「ふっ！」俺の右ボディストレートが
まっすぐにマルタさんのみぞおちを貫くはずが
マルタさんが距離を詰めてきていた結果、
俺の拳はマルタさんの胸元に沈んでいく
グローブ越しにさえ伝わる
ボニュンっとしたやわやわな重量感のある感触…
そののちマルタさんの胴体にパンチが到達し
バムンッ！という音を立ててマルタさんの胸が左右に大きく弾かれて揺れる
「うぁっ！」マルタさんがたじろいで息が詰まった可愛い悲鳴を上げた
ふっ！
うぁっ！
ぶるんっ

私の連打の繋ぎのタイミングに合わせてマスターは的確に反撃を挟んできた。
「ふっ！」
（しまった…！）
マスターの右ボディストレートがまっすぐに伸びてくる。
私が距離を詰めていった結果、マスターの拳は私の胸元に沈んでいく。
踏み込んでカウンター気味におっぱいを左右にえぐり潰しながら私の胸の中に入ってくるマスターの腕…
ふっ！
うぁっ！
ぶるんっ
そののち私の胴体にまでパンチが到達し「バムンッ！」という音を立てて私の胸が左右に大きく弾かれて揺れる。
「うぁっ！」
私は思わずたじろいで息が詰まった可愛い悲鳴を上げた

ボッ!!
ボッ!!
ボッ!!
ぶルッ!!
ふっ!

思いがけない感触に、一瞬俺は動きを止めてしまった
「ふっ！」ボコオッ!!!「うぐっ!?」
予想外の着弾地点に一瞬たじろいだ俺は
まともにマルタさんの反撃のボディアッパーを
逆にみぞおちに受け入れてしまった
息が詰まり、俺はマウスピースの隙間から
よだれを吹き出させられてしまう
ふっ！

ふっ！
私にパンチを打ち込んだはずのマスターは、何故か一瞬動きを止めてしまった
「ふっ！」
ボゴオッ！！
「うぐっ？」
すぐさま立て直した私は今度はマスターに反撃のボディアッパーを逆にみぞおちに叩き込んだ
ガルッ!?
マスターは私のパンチで息が詰まり、マウスピースの隙間からよだれを吹き出してしまう

はぁっ
ハッ
ハッ
ハッ
ハッ
はぁ
ハッ
ぷにゅ
ぷにっ
ぷにゅ
ぷにゅ
プル
プル
プル

マルタさんの強烈なボディブローに
俺は上半身を突き出したまま
ゾンビのように前に歩みを進めそのままマルタさんの
豊かなおっぱいに顔を預ける形になってしまった
〈吊り下げた肉塊をユッケにするボディブロー…
もらっちゃいけないパンチをもらってしまった…〉
必死にクリンチの形でマルタさんの身体にしがみつく
ボコボコにされた俺の顔面を癒す
せっかくの天国の柔らかな感触にも、
苦しさが先だって味わう暇なんかなかった。
『んっ…マスター…♥』
マルタさんの火照った艶っぽい声が耳元で響く
ハア
ぷにゅ
ぷにっ
ぱふ
ハア
はあっ
プル

マスターは私の強烈なボディブローに屈して
上半身を突き出したまま
ゾンビのように前に歩みを進めると
そのまま私のおっぱいの間に軟着陸して
顔を預ける形になってしまった
今度は私の方が一瞬硬直して動きを止めてしまった
その間にマスターは必死にクリンチの形で
私の身体にしがみつく
プル
（……！）
ハア
ぷにゅ
ぷにっ
ぱちゅ
ぱぁ
ハァ
（やりすぎちゃったかな…？
マスターすごく苦しそう…）
胸の間で必死に呼吸を荒げるマスターに
思わず心配をしてしまう
『んっ…マスター…♥』
お互いの火照った肌が触れて
私は思わず艶っぽい声を出してしまう
プル

ハァ
ハァ
ハァ
ハァハッ
はぁ
ハァ

「ハア…、ハア…、ハア…」
ずり落ちそうな体をマルタさんの身体をよじ登るように
ズリズリと肌を押し付けながら何とか体勢を立て直す
「ハア…、ハア…、ハア…」
お互いの熱い吐息で白い湯気が見えそうなほど
湿気と熱気を持った体を押し付け合う…
ハア
はぁ
ハア
(マルタさんの柔肌が汗でぬめって…)
思わずマルタさんの肌触りを全身で堪能してしまう
あまりの気持ちよさに身震いしてしまいそうだ。
少しづつ体力が回復してくるが
お互い体を離そうとしない爛れた時間は
自動ゴングが鳴るまで続いた
カーンッ!

「ハア…、ハア…、ハア…」
マスターはずり落ちそうな体を私の身体をよじ登るようにズリズリと肌を押し付けながら何とか体勢を立て直す
「ハア…、ハア…、ハア…」
お互いの熱い吐息で白い湯気が見えそうなほど湿気と熱気を持った体を押し付け合う…
ハア
はぁ
ハア
(マスターの火照った身体が汗でぬめって…)
思わずマスターの肌触りを全身で堪能してしまうあまりの気持ちよさに身震いしてしまいそうだ。
少しづつ体力が回復してくるがお互い体を離そうとしない。爛れた時間は自動ゴングが鳴るまで続いた
カーンッ!

ハァ
ハァ
ハイッ
はぁ
ハァ
はぁっ
はぁっ

ゴングが鳴り、
お互いが重い足取りでコーナーに戻る。
『ハア…、ハア…、ハア…、ハア…、ハアッ…』
身体が重く、だるく、熱くて痛い…
スツールに座っている1分間はあっという間に過ぎ去っていく。
（強い…、やっぱりマルタさんは強い…）
お互いに体力は底をつき、
次のラウンドが決着のラウンドになるだろう
そういう予感をお互いに感じ取っていた
ハアッ
ハア
ハア
ハア

ゴングが鳴り、
お互いが重い足取りでコーナーに戻る。
『ハア…、ハア…、ハア…、ハア…、ハア…、ハアッ…』
身体が重く、だるく、熱くて痛い…
スツールに座っている1分間はあっという間に過ぎ去っていく。
(マスターのパンチを侮ってたわね…)
お互いに体力は底をつき、
次のラウンドが決着のラウンドになるだろう
そういう予感をお互いに感じ取っていた
ハア
ハアッ
ハア!
はあっ
はあっ

ドゴッ!!

カーンッ！ ラウンドが始まり、ふたり、磁石が引き合うようにリング中央に向かって飛び出していく
（マルタさんが与える試練に打ち勝って、俺はマルタさんに認められるんだ…っ！）
同時に右ストレートと左ストレートを繰り出すとそれは同時にお互いの顔に着弾した
バグンッ！！

カーンッ！ ラウンドが始まり、ふたり、磁石が引き合うようにリング中央に向かって飛び出していく
（マスターに負けるわけにはいかないでしょ…っ！）
同時に右ストレートと左ストレートを繰り出すとそれは同時にお互いの顔に着弾した
バグンッ！！！

ガシャ!!

（うぶ…っ…）
マルタさんの強烈な右ストレートに意識を吹き飛ばされそうになる
それでも体勢を立て直し、半ば無意識に同じパンチを繰り出す。
だがそのパンチは
追撃で踏み込んできていたマルタさんの
右ボディストレートをカウンター気味に
貰う結果となってしまった。
ドボオッ!!
「ぶえっ!?」噛み締めたマウスピースの隙間から
絞り出された液体がほとばしる。
ぐちゃっとマルタさんの拳で内臓が潰された嫌な感触…
だが俺は逆に腹部の痛みで吹き飛びかけた意識を取り戻した

(く…っ…)
マスターの強烈な左ストレートに意識を吹き飛ばされそうになる
それでも私は体勢を立て直し、半ば無意識に同じパンチを繰り出す。
だがそのパンチは体勢を崩しながら打つ
死にパンチとなってしまった。
しかしそれは追撃で踏み込んできていた
マスターの左パンチに私の右ボディストレートを
カウンター気味に合わせる事となり
結果的に会心のラッキーパンチとなった。
ドボオッ!!!
「ぶぇっ!?」マスターが噛み締めたマウスピースの隙間から
絞り出された液体がほとばしる。
ぐちゃっと私の拳の奥でマスターの内臓が潰される感触…
(もらった…)
私はこの気持ちいい感触に優越感すら感じてしまっていた。

ボディ!!
ズボッ!!

「沈め……っ……！」
マルタさんが俺にとどめを刺さんと右フックを繰り出す
だがそれよりも早く俺の反撃の右フックがマルタさんの左頬にカウンターで届いていた
「ぶふぇっ！？」
バゴンッ！！
ぶふぇっ！？
バゴッ!!!!

「沈め…っ…!」
私はマスターにとどめを刺さんと右フックを繰り出す
だがそれよりも早くマスターの反撃の右フックが
私の左頬にカウンターで届いていた
バゴンッ!!
「ぶふぇっ!?」
ぶふぇっ!?
バゴッ!!!

ドドドドドメッ!!
ぶるん、

ドボッ!!
ぶるんっ
ぐぷっ…!
続けざまにマルタさんのボディへボディアッパーを突き入れる
ドボォッ!
ぐぷっ…!
マルタさんの腹筋を貫いて内臓をえぐり潰す感触が拳に伝わってくる
(くっ、だが俺の方もスタミナが限界だ…)

ぐぷっ…!
ぶるんっ
ドボッ!!
マスターは続けざまに私のボディへボディアッパーを突き入れた
ドボォッッ!!
ぐぷっ…!!
マスターの拳が私の腹筋を貫いて内臓をえぐり潰してくる感触
(ぐえ…っ、まずい…、息が…)

ドゴッ!!
ドゴッ!!

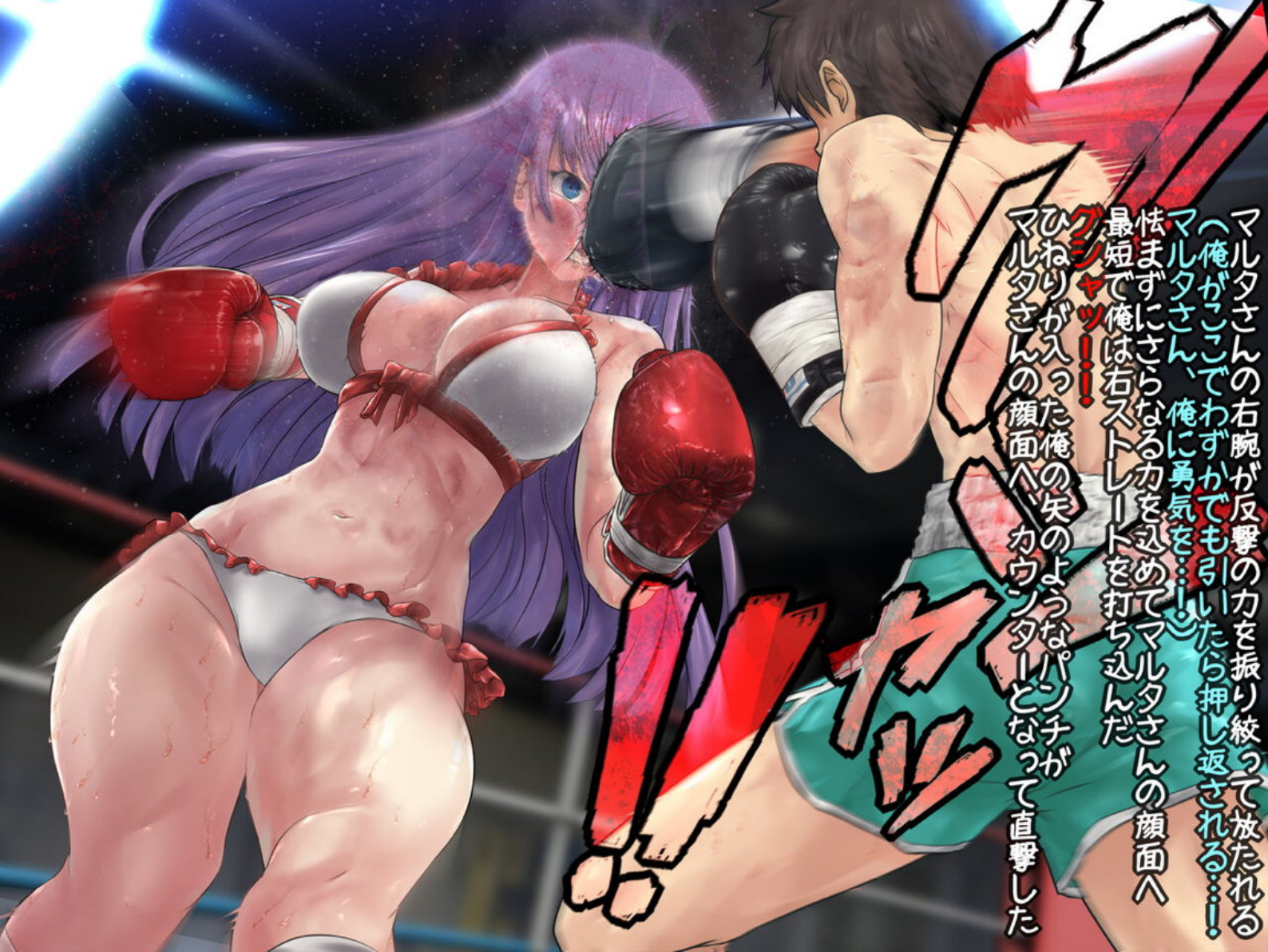
（これで決めないと負ける…！）
俺は意を決して最後のスタミナを絞り出し、息を止めてマルタさんに連打を打ち込んでいく
バグッ…！！
グシャッ…！！
「ぶふっ…！！」
「うぐっ…！！」
ボゴッ！！
ラッシュ！！
右フック、左フック…
俺のパンチをガードできずマルタさんはその身に受け入れ
俺の拳にはマルタさんの柔らかい頬肉をグローブで弾き飛ばす感触が伝わる

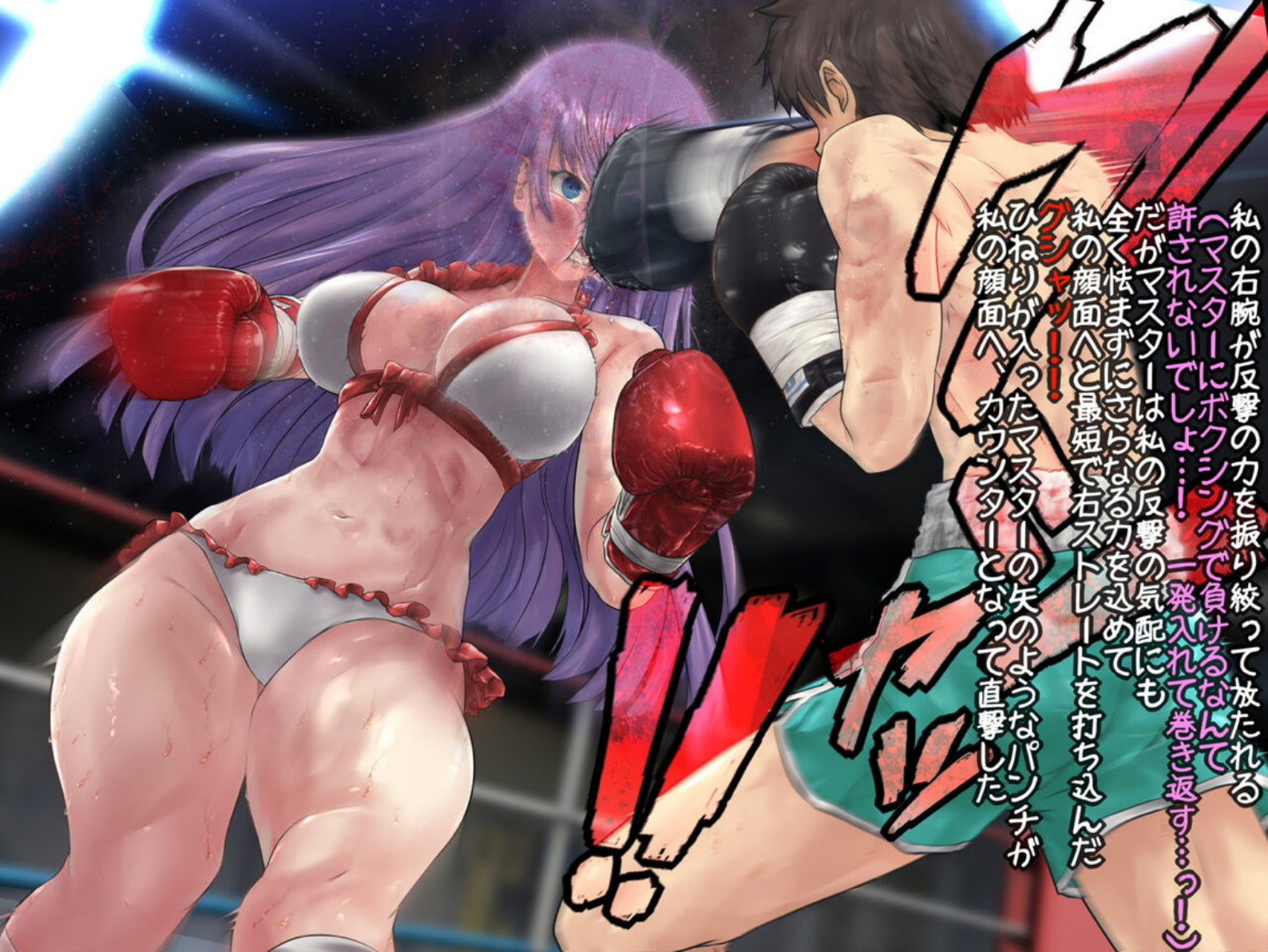
（このまま押し込まれたらマズい…！）
マスターはここぞとばかりに
私に連打を打ち込んでくる
『ぶふっ…！』
『うぐっ…！』
ボフッ!!
ドッ!!
ラッシュ!!
右フック、左フック…
マスターのパンチを私はガードできず
その身に受け入れる事しかできない
私の柔らかい頬肉を
マスターのグローブが容赦なく弾き飛ばす

ドクッ…
ラビッ…
ガシャッ!!
ぶぁっ
キィィ
キィィ
ドゴッ!!
ぶふっ!?

(これで……!これで決める……!
イっちまえマルタさん!)
無呼吸で一心不乱にロープに詰まったマルタさんを連続で打ち続ける
バグッ!ドゴッ!グシャッ!!
『うぐっ…ぶふっ!?ぐふっ…』
パンチを受けるたびにマルタさんの顔や体から汗とよだれの飛沫がキラキラとしぶいて飛んでいく
うぐっ…
ぶぼっ
ぶふっ!?
パンチの連打でマルタさんの身体が足が浮き上がるほどロープに押し付けられロープとコーナーポストが金属的な悲鳴を上げる
(もう…息が…)
俺の攻撃の嵐がわずかに緩んだ気配にマルタさんの瞳に力が宿った気がした
ドゴッ!!

ロープに詰まった私を、好機と見たマスターが一心不乱に連続で打ち続ける
バグッ！ドゴッ！グシャッ！！！
うぐっ…ぶふっ！？ぐふっ…
パンチを受けるたびに私の顔や体から汗とよだれの飛沫がキラキラとしぶいて飛んでいく
うぐっ…
ぶふっ…
ぶふっ!?
パンチの連打で私の身体が足が浮き上がるほどロープに押し付けられ
ロープとコーナーポストが金属的な悲鳴を上げる
(ぐぶっ…バ、このままじゃ…沈む…)
暴力の嵐の中、私は覚悟を決めて最後の反撃する力を拳に込めた
ドゴッ!!


マルタさんの右腕が反撃の力を振り絞って放たれる
(俺がここでわずかでも引いたら押し返される…!)
マルタさん、俺に勇気を…!
怯まずにさらなる力を込めてマルタさんの顔面へ
最短で俺は右ストレートを打ち込んだ
グシャッ!!
ひねりが入った俺の矢のようなパンチが
マルタさんの顔面へ、カウンターとなって直撃した
ガッ


私の右腕が反撃の力を振り絞って放たれる
〈マスターにボクシングで負けるなんて許されないでしょ…！〉一発入れて巻き返す…？！〉
だがマスターは私の反撃の気配にも全く怯まずにさらなる力を込めて
私の顔面へと最短で右ストレートを打ち込んだ
グシャッ！！
ひねりが入ったマスターの矢のようなパンチが
私の顔面へ
カウンターとなって直撃した

ドガッ
あう…

『あう…』マルタさんが弱々しい声を吐きだしてとうとう俺に隙を見せた
(マルタさん…っ)
『俺のパンチで…イけっー!』
あう…
俺の渾身の力を込めた右アッパーがマルタさんのアゴに吸い込まれる
グシャッ!!!
(俺のグローブがマルタさんに届いた…!)
ぶるんっ

「あう……」意識が飛びかけて、思わず私は弱々しい声を吐きだして
マスターに隙を見せてしまっていた
（マスター……っ……）
「俺のパンチで……イけっ！」
あう……
マスターが渾身の力を込めた右アッパーが
ノーガードの私のアゴに吸い込まれる
グシャッ！！！
（マスターの顔……、縦に流れて……見えなく……）
ぶるんっ

ドサッ…

バゴォンッッ!!
俺のグローブがこれ以上ない快音をリングに響かせる
俺はパンチを天空へ向けて思い切り振り抜くと
ぶぐぇっ…
マルタさんが断末魔の叫びをあげて空中を浮遊する
(やった……!)
完璧な手ごたえを感じる一撃だった
空中でマルタさんの口から零れたマウスピースが
きらきらと煌いて、美しい唾液の糸を纏って
マルタさんと共にまるでスローモーションで
浮かんで見えるようだった

ぶぐぇっ…

バゴォンッッ!!
マスターのグローブがこれ以上ない快音をリングに響かせる
マスターはパンチを天空へ向けて私の身体ごと思い切り振り抜くと
ぶぐぇっ…
私は断末魔の叫びをあげて空中を浮遊する
(こ、こんな……!)
それは私に敗北を感じさせるのに十分な一撃だった
空中で私の口から零れたマウスピースが
唾液の糸を纏って
私の身体と共に、地球を巡る人工衛星のように
リングの真上を浮遊している…

ぶぐぇっ…

全力殴り
あうっ…！
はぁ
はぁっ
ボトッ

宙に浮いたマルタさんの肢体は派手な音を立ててハードランディングでリングに墜落し吹き飛ばされたマウスピースが一瞬遅れてぽとっと湿った音を立ててマットに転げ落ちた。
「あっ……！」
「はあ、はあ……、はあ……、やった……！」
呼吸も絶え絶えな状態にもかかわらず俺は思わずそんな言葉が口をついて出てしまう
あうっ…！
はあ
はあっ
ボトッ

宙に浮いた私の身体は派手な音を立ててハードランディングでリングに墜落し吹き飛ばされたマウスピースが一瞬遅れてぼとっと湿った音を立ててマットに転げ落ちた。
「あっ……！」
「はあ、はあ……、はあ……、やった……！」
半失神状態の私にマスターのそんな声がおぼろげに届く
（まだ……、まだやれる……っ……）
あうっ……！
はあ
はあっ
ボトッ

ワン
ツー
スリー
ダウン
ダウン
ダウン
ダウン
あっ
あっ…
ゆメッ

「がふっ…」
マルタさんがか細い息を吐いて後頭部をマットに落とした。
事切れる生き物の最後に鳴き声のように
ツー
スリー
あっ
あっ…
ゆさっ
どく
俺のアッパーカットが胸元に擦れて露わになったマルタさんの巨乳がまぶしい…。
カウントを数える事すら忘れるところだったが気が付いてマルタさんにカウントを入れ始める。
「ワン、ツー、スリー…」
「あっ、あっ…」
マルタさんが苦しげにうめき声を吐き出す。

『がふっ…』
私はか細い息を吐いて後頭部をマットに落とした。
事切れる間際のように
ツー
スリー
マスターのアッパーカットが胸元に擦れておっぱいが露わになってしまっている…。
意識が途切れかけてマスターがカウントを数えていることも上の空で聞こえていない…
『ワン、ツー、スリー…』
『あっ、あっ…』
(ダメなのに…っ、マスターに
ボクシングで負けるなんて許されないのに…っ)
そんな思いだけで苦しげにうめき声を吐き出す。
あっ
ゆメ〜〜
びくッ
どク

ナイン!
テン!
ぷく…
は…
はふ…
ぷく…
ぷく…
ぷるん
ぷるん
ボカ
ボカ

『ファイブ、シックス…』
マルタさんが俺のカウントに合わせるかのようにぴくぴくと痙攣する
『ナイン！
テン！！』
『はっ…、はふ…っ…』
ぴく…
は…
はふ…っ
ぴく…
ぴく…っ
プルン
プルッ
『セブン、エイト、…』
（マルタさんのマウスピースがほかほかと湯気を立ててる…）
（リングに転がったままでもうマルタさんのお口の中には帰れないだろうな）
『ナイン、テン！』
勝負が決した瞬間マルタさんの身体が一際びくびくと痙攣する
『イ…っ、イク…っ————♥♥♥♥♥』
マルタさんとの試合は俺の勝利で終了した
マルタさんの股間にじわっと染みが広がる
（マルタさん俺のパンチでイった…？）

『ファイブ、シックス…、
私の身体がマスターのカウントに合わせるかのようにぴくぴくと痙攣する
ナイン！
テン！！
『は…、はふ…っ…』
ぴく…
は…
はふ…っ
ぴく…
ぴく…っ
プルン
プルッ
『セブン、エイト、…』
（マスターにボクシングで負けるなんて
ダメなのに…
マスターのパンチに屈服するの…、
こんなに気持ちいいだなんて…っ）
『ナイン、テン！』
勝負が決した瞬間
私の身体は一際びくびくと痙攣してしまう
イ…っ…イク…っ！！！！
マスターとの試合は私の敗北KOで終了した
私の股間にじわっと染みが広がる
（マスターのパンチでイっちゃったぁ…っ）
ポカ
ポカ

パン
パン
パン
パン
パン
パン
おっ♥
おっ♥
おっ♥
おっ♥
ギシ
ギシ
ぷるん
ぷるん
プニュ
プニュ
プニュ
プニュ

マルタさんの痴態を晒したK○姿を見て俺はもう我慢できなくなって矢も楯もたまらずマルタさんに覆い掛かる
『マルタさん♥マルタさんっ♥』
パンパンパンパンパンパンッ！
俺の有無を言わせないバックからのピストンに耐えられずマルタさんがケモノのような声を出してあえぐ
『おっ♥おっ♥おっ♥おっ♥』
『マルタさんもう我慢できないんでしょ？俺のアッパーでイっちゃって、おまんこぐちょぐちょになってるじゃない♥』
ロープの軋みを利用して跳ね返ってくるマルタさんのお尻にどんどん連続カウンターの様にペニスを突き入れていく
『マスターのっ♥おちんぽでっ♥ボコボコにっ♥負けさせられちゃうっ…♥』
パン
パン
パン
パン
おっ♥
おっ♥
おっ♥
おっ♥
ズン
ズン
ぷるん
ぷるん

マスターは私の痴態を晒したK〇姿を見て
矢も楯もたまらなくなったのか身動きできない私に襲い掛かってきた
『マルタさん♥マルタさんっ♥』
パンパンパンパンパンパンッ！
私はマスターの有無を言わせないバックからのピストンに耐えられず
ケモノのような声を出してあえぐ
『おっ♥おっ♥おっ♥おっ♥』
『マルタさんもう我慢できないんでしょ？
俺のアッパーでイっちゃって、
おまんこぐちょぐちょになってるじゃない♥』
パンッ
パン
プルン
プルン
プルン
ぷるん
ぷるん
おっ♥
おっ♥
おっ♥
おっ♥
ズボッ
マスターはロープの軋みを利用して跳ね返る私のお尻に
どんどん連続カウンターの様にペニスを突き入れてくる
『マスターのっ♥おちんぽでっ♥ズボッ
ボコボコにっ♥負けさせられちゃうっ…♥』
パン

パンパン
パンパン
パンパン
パンパン
パンパン
あっ
あっ
あっ
ぐちゃ
ぐちゃ
ぐちゃ

今度はマルタさんをリング上に押し倒して
ボコボコにしたマルタさんの顔を眺めながら
正常位で挿入してマルタさんのおまんこを
乳海攪拌のようにぐちょぐちょとかき回すと、
マルタさんに勝利した満足感と征服感が
波のように押し寄せてくる。
そのリズムに合わせて俺は腰をピストンさせて
マルタさんを犯していく。
ピストンのリズムに合わせてマルタさんの巨乳が
ぶるんぶるんと波打つ。「あっ♥あっ♥あっ♥」
マルタさんも俺の突き入れに反応して
気持ち良さそうに声を上げる
「やばっ…！やっぱりマスターのおちんちん良い…っ♥」
あ♥
あ♥
パン！
パン！
ずちゅ♥
ムちゅ♥

マスターは今度は私をリング上に押し倒して
ボコボコにした私の顔をねっとりと眺めながら
正常位で挿入して私のおまんこを
勝利を味わうようにぐちょぐちょとかき回す。
異教徒の軍勢に敗北して蹂躙されるような屈辱感と被虐感。
(でも…っ、こんな感覚がこんなに気持ちいいなんて…
私ってこんなマゾだったのかなあ…っ♥)
マスターは私のそんな気持ちにを察したのか
さらに獣のように私を犯していく。
ずちゅ
くちゅ
マスターのピストンのリズムに合わせて私のおっぱいが
ぶるんぶるんと波打つ。あっ♥あっ♥あっ♥
思わずマスターの突き入れに反応して
気持ち良さそうに声を上げてしまう
やばっ…やっぱりマスターのおちんちん良い…っ♥
あ♥
あ♥

ビュッ
ビュルルルッ
ぶぷっ
ぶぷっ
ぶぷっ
ぶぷっ

射精感が最高潮になったところで
マルタさんの中に遠慮なく射精する
ビュブッ！ ビュルルるッ！！
「ふあぁっ♥」
マルタさんの中にどぷどぷと注がれていく大量の精液
「マルタさん最高…、気持ちいい…♥」
ビュブッ♥
どぷ♥
ビュルルるッ♥
ぐちゅ♥
ぱちゅ…

ビュブッ♥♥
どぷ♥
ビュルルルッ♥♥♥
ぐちゅ♥
ぱちゅ…♥
（一番奥に押し付けてきたぁ…♥ 来るっ♥）
マスターがおちんちんを私の膣壁に押し付けると
どくどくと私の中に遠慮なく射精する
ビュブッ！ ビュルルッ！ 「ふあぁっ♥」
私の中にどぷどぷと大量の精液が注がれてくる
「マルタさん最高…、気持ちいい…♥」

ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ドクッ
ドクッ
どろっ…
たらーっ♥

「たっぷり射精ましたね…♥」
二人、荒い息を吐いて一息ついた後
ペニスを引き抜くとマルタさんのおまんこから
マルタさんの中に射精したこってりした精液が
ディープキスしたように糸を引いて垂れ落ちる
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ビクッ
どろっ…
たらーっ♥
「んっ…マルタさん…♥」
そんな様子に釣られて
マルタさんにねっとりとしたキスをする

たっぷり射精ましたね…♥
二人、荒い息を吐いて一息ついた後
マスターがおちんちんを引き抜くと
私のおまんこから射精されたこってりした精液が
ディープキスしたように糸を引いて垂れ落ちる
んっ、ハァ
マルタさん…♥
そんな様子に釣られてか
マスターが私にねっとりとしたキスをする
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ビュッ
どろっ…
たらーっ♥

ガク
おんっ♥
ギシ
ガク
ギシ
はうっ♥
ガク
ゆさ♥
ギシ
ガク
パン
ガク
ギシ

『ま…、まだするの…？♡』
マルタさんを抱き上げてロープに押し付けると
そのままロープの反動を利用して連続ピストンを開始する
『あうっ♡ おんっ♡ はうっっ♡』
ギシギシとロープが掛けられる荷重に
悲鳴を上げるのと同じタイミングで
マルタさんも嬌声を上げる
（されるがままのマルタさんかわいい…♡）
あうっ♡
ぱちゅ
ガク
ギシ
ずぱんっ
ぱちゅ
はうっ♡
おんっ♡
ギシ
マルタさんのおっぱいに胸板を押し付けながら
密着したまま、さらに獣のように
腰をマルタさんに打ち付ける
『またイくよ、マルタさんっ♡』びゅぐびゅぐびゅぐっ！
今度も遠慮なくマルタさんに中出しする
ギシ

「ま…、まだするの…？」
マスターは私を抱き上げてロープに押し付けると
そのままロープの反動を利用して連続ピストンを開始する
「あうっ♥おんっ♥はうっ♥」
ギシギシとロープが掛けられる荷重に
悲鳴を上げるのと同じタイミングで
私も嬌声を上げる
（マスターのされるがままになってる…っ♥）
あうっ♥
ぱちゅぱちゅ
ガクガク
おんっ♥
はうっ♥
ギシ
ゆさゆさ
ぱちゅぱちゅ
ぱちゅぱちゅ
ぱちゅぱちゅ
ぱちゅぱちゅ
私のおっぱいに胸板を押し付けながら
密着したまま、さらに獣のように
腰を私に打ち付けてくるマスター
「またイくよ、マルタさんっ♥」びゅぐびゅぐっ！
今度も遠慮なく私の膣に中出しする

ギリッ
ガク
あぶう
ギシ
うぶぶっ
ぷる
ぷる
ガク
ガク
ガク
ポタ
ポタ…

ふくっ、気持ちよかったあ…♥
おぶぅ…、うぶぅ…
マルタさんはロープにもたれてグロッキーになったボクサーのようになってしまった
マルタさん、イっちゃったね…♥
マルタさんからペニスを引き抜くとぼとぼとっと精液がリングに垂れ落ちる
マルタさん、また俺とボクシングしようね♥
そう言って失神状態のマルタさんに再びキスをした
ボディッ
ガク
ガク
ガク
ガク
ぷるる
ぷるっ
ポタ
ポタッ

『ふくっ、気持ちよかったあ…♥』
『おぶぅ…、うぶぅ…』
私はロープにもたれてグロッキーになったボクサーのようになってしまった
(マスターのおちんぽで磔にされちゃったぁ……♥)
『マルタさん、イっちゃったね…♥』
マスターが私からペニスを引き抜くとぼとぼとと精液がリングに垂れ落ちる
『マルタさん、また俺とボクシングしようね♥』
マスターはそう言って失神状態の私に再びキスをするのだった
おぶぅ
うぶぅ
ボタッ
ガク
ガク
ガク
ボタ
ボタッ